
千年王城

黒雛 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年王城

【著者名】

黒雛 桜

【Zコード】

N1379D

【あらすじ】

ハルは引越し先のまちで、様々な未知との遭遇をする・・・（空いた時間にでもご覧になってください。注）実在の京都府とは関係ありませんので、ご理解のほど、よろしくお願ひします。ペコリ現在1話から細かい部分に修正をかけています。見やすいようにしているだけで、ほぼ違ひはありません。」了承ください。

1 ハルと千年王城

春

もう少しで俺は15歳の誕生日を迎える。

この春休みが終れば、中学校生活最後の学年になるんだ。

大事な仲間と受験、ギリギリまで遊んで、
卒業式が終つたら好きなあの「」に告つて、

ずっと東京で暮らしていくんだ……

ずっと暮らして……

ずっと……

……そう思つてたのにー

「てか、何でこの時期に引っ越さなきゃなんねえんだよーーー。」

俺は高速道路を走る乗用車の車内で、親父に不満をぶちまけた。住み慣れた東京から家族で引越し。

「ははは。仕方ないだろ？ 春彦。転勤なんだから」

笑いながら息子をなだめられると思ってんのか？ 父よ。親の仕事の都合だかなんだかしらねえが、俺の事はどうでもいいのか？！

「お兄ちゃんわがまま言っすぎ～」

俺をバカにするような口調で横やりを入れたのは、妹の秋奈。この春から中学生になるムカつく妹……

「大丈夫よ、はるちゃん。転校したつてすぐにお友達できるわよ～。だって、京都はすてきなところだものー！」

親父に負けず劣らず、能天気なことを言つてのけるのは、俺の母。

柔よく剛を制す

俺がどんなに頑張って反論しても、母には効かない……つてゆうか『はるちゃん』はやめろって。

引越しなんて嫌だつた。

だが今、大好きな東京都を離れて新天地である京都府へ……車で移動中だ……（ぐすん。

俺は櫻井 春彦（14）

後1週間もすれば、15になるけど。

生まれ育った東京を去り、親父の新しい勤務地、京都で暮らすことになった。

京都ねえ。

実際俺あんまよく知らねえし……

京都・日本の歴史的都市。

政治・文化の中心地となり、延暦13年に始まる千年の都。
別名を『千年王城』と呼ぶ……（「京都タウンガイドMA

X」抜粋）

やっぱ、あんまよくわからねえ。

春は出会いの季節、見知らぬ土地の京都。

ああ……嫌な予感がするのは、きっと俺だけだらうな……

1 ハルと千年王城（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。
まだまだ不慣れで指摘や感想いただけたらいなと思います
また見てやってください^_^

2・スペック現る

「ねえねえ、お母さん！　この塔の前で撮りついで

「あなた、あそこの橋もいいんじゃないかしら？」

「よし。たくさん記念写真撮つていこうか」

「ねえねえ、お母さん！　この塔の前で撮りついで

「京都に到着した櫻井家一行。

真っ先に向かったのは　観光スポット。

え？

観光……？

つてか、引越し先の家に行こうぜ？

何で観光なんだよ！！

まるで修学旅行生のようにはしゃぎまわり、あちこちで写真を撮
すちょっと恥ずかしい家族連れ　いや、これちょっとどうじや
ねえよ？

かなり恥ずかしいんですけど！！

記念写真を撮るのに忙しい家族を尻目に、俺は一人呆れて歩き出
した。

もちろん遠くまで行けるわけないけど、人気の無い場所を見つけ
て腰を下ろす。

はあ、なんとなく憂鬱。^{ヨウウツ}

巨大な朱塗りの門の周りには、珍しく一人も観光客がいない。他の場所にはたくさんいるつてのに、変なの。

まあ今は一人になりたい気分だから、好都合だけどさア……

「少年、この地は嫌いか？」

突然後から聞こえる女の声に、飛び上がりそうなほびびびつた。だつて、ついたつき周りを見たときは誰一人いなかつたんだから！

バツ。つと振り向くと、俺の後ろには女の子が立っている。

……それも、ちょっと、変な女の子が。

顔はまあ、かわいい。

俺と同い年くらい？

だけど。

真っ赤で肩につかない程度に切つてある髪の毛、金色っぽい目の色。

服は和服（長めの袖丈に、黒と金の帯、襷下の短い着物……着物の下に履いてるのつて……スペツツジヤね？！）だし。足には草履？

かなりの時代錯誤だと思うが！

いやいや、それ以前になんかおかしいって――

……取りあえず関わらない方がいいと思つ。
シカトだ。シカトしとこう。

「……」

「」の場を離れようと無言で立ち上がり、歩き出やつとした。

その時！

俺の肩に何かが当たつた。って、何が？

そつと右肩を見てみると、黒っぽい鉄の扇が首筋に当たられてい
るではありませんか。

そう。鉄の扇が。

つて、鉄？！ 危ない、危ないいい！！

「少年、聞こえなかつたか？『嫌いか？』と聞いたのだ」

かわいらしい顔に軽く怒りがこもつてゐる。微笑んだ唇が引きつ
てる。目が笑つてねえよ！
ちょ、まつ……

『嫌い』なんて言えないじゃん！！

「……いえっ！ だ、大好きです！」
「やっぱり そうだと思ったのだ！」

ちょっと変わった女の子はパッと明るく表情を変え、扇を懐へしました。

その場にへたり込み、満足げにこの場を去つていく彼女の後姿を、俺は呆然と見つめる……

一体なんなんだよ――――――!

3・無人の家で流れるドラマ主題歌の座

はあ……疲れた……

能天氣家族に振り回されるわ、変なスペツツ女に会うわ。
散々なんですが。

やつと観光 + 記念撮影が終わり、新しい住まいへと車を走らせる
親父。

その車内で俺は、さつきの変なスペツツ女のことを考えていた。

なんなんだよ、変な質問しやがつて。
それにあの格好。

現代でさすがにアレはないだろ。

俺の首に当たった鉄扇、絶対武器だつて！

はあ……東京に帰りたい。（むづ俺ん家はないけどさ）

頭を抱えてうなだれている俺を見た妹の秋奈が、一言。

「お兄ちゃん、無駄に考えるとハゲるよ？」

ブチツ

……ああ。ここが車の中じゃなかつたらバツクドロップかまして
やるんだけどな。

長かつた道のつけはやつと終わりを迎えるみたいだ。

閑静な住宅街の細道を車で抜け、周囲の建物より頭が飛び出るマンション駐車場に車を停める。

マンションやアパートが立ち並ぶ一角に、我が家がそびえ立っていた。

11階建ての高級マンションは夕日を背に赤く染まっている。

「なかなか立派だらう?」

得意げに話す親父……いや、お父さん。見直しました!!

「あ、はるちゃん。引越し屋さんが運んでくれた荷物全部届いてるか、先に見て来てくれない?」

前にも言ったが、母に嫌だのなんだのってのは効かないのだ!

「ちえつ。わかつたよ」

俺
つてば、物わかりいいよなあ。

つてか、「はるちゃん」はやめろ。

そんなわけで俺は一人、エレベーターに乗り、10階のボタンを押す。

ぼちつとな。

どんどんエレベーターが上ると、ガラス越しにまきりと見える夕日。

すげえいい眺め!

9・10……チン!

10階の通路を歩き、1001号室の前に立つ俺。
やべえ、ちよつとドキドキするな。

ここが俺の新しい家か。

ガチャツ

戸を開けて中へ入るとすでに荷物は運ばれ、全部揃っているみた
いだ。

家具やダンボールが所せまじて置いてある中、リビングでテレビ
の音が聞こえてきた。

……え？ テレビ？

チャツチャ、チャチャチャ チャツチャ、チャチャチャチャーチ
ヤチャ チャチャーチヤチャ

首をかしげながら、そーっとリビングに近づくと、夕方の再放送
ドラマの主題歌が流れている。

やつぱりテレビの電源入ってる……！

引越し屋のヤロウ、勝手にいじりやがったな……！

腹立しさを押さえてテレビの電源を切らうと、勢いよくリビン
グのドアを開けた俺。

バンッ！

.....

コレクションで買ったものよ……

あらえねえ。

そりゃの変な（赤毛に金田、着物の下にスパツツ着用）女じやね
えかー————！

「ああ、少年。遅そすぎだぞ」

『ああ、少年。』『じゃねえよーー！何その俺が悪いみたいな言い方！
いやこや、それよがなんで俺ん家にいんの？！
何でママ見てんの？！

つてゆづか……俺、じつはいめばいいんだー？！

3・無人の家で流れるドラマ主題歌の怪（後書き）

サブタイトル長くてすみません【汗

4・朱雀現る

なぜか俺の家に勝手に上がりこみ、無断でテレビをつけ、悪びれもなく座りながらドラマを見ている　観光地で会った、かなり変わった見ず知らずの女の子。

やべえ、考えすぎてわけ分かんなくなってきた。
なんだ、この展開？

そんな時、玄関の戸が開く音が。

ガチャッ

ドアを開けてやつて来たのは、櫻井家ご一行。

親父たちだ……！助かったあ！　親父でも母さんでもいい！　こいつを追つ払ってくれ！！
心の中でそう願つた。

切に願つた……

願つた……

親父はリビングを見回した後、田線をテレビの前に座る人物へ走らせ、一言。

「朱雀さんー早かつたんですねえ、何も用意できなくて申し訳ありませんな」

……ん?

「じじじ、じうなってるんだ?」この展開は?

「主殿、気にする」とはない。わたしの方で勝手にさせてもいいわ『変な女、もとい、『朱雀さん』が微笑んで応える。

「朱雀ちゃんがいれば、ここでの暮らしが安心ねえ」「母の意味不明の言葉。

「ホントだよね、スザクちゃんが家に来てくれてよかつたあ」「秋奈、なにそのフレンドリーっぽいノリは?」

「あ、春彦は会ってなかつたよな?」こちらは朱雀さんだ。
“京都親善・世話焼き大使”だそうで、やつきの観光地で色々お世話になつてなあ。

不慣れな土地だしいつそ彼女に住み込みで色々教わろうかと思つて!」親父、笑顔でうなずきながら話す。

ちょっと待てえええ！！

なんだそのうさんくさい親善大使つて！こんな子供が大使なわけねえだろうが！

いや、それよりも、すみません、住み込み？

もちろん断固拒否しますよ。」ればかりは母に何を言われても
反対しますよ。

俺が言いかけたその時。

「少年、もちろん歓迎してくれるな？」
朱雀さんが微笑みながら例の鉄扇を懐から取り出すのを、俺は見
た……。

「次は（首を）落とすぞ？」

「よ、よ、ようこそ。……さ、櫻井家へ」

ホント、俺つて物わかり・・・いいよね・・・

かくして、我が家に悪魔が住みつくことになつたのだ……（うつ、

うるわ、
ぐすん。

5・横文字は最大の武器

春は変なやつが出て来て言つたが、その通りだ。

俺の田の前に立つやつ、それだ。

般若のような形相で俺を睨み、尚且つ仁王立ちして立るのは昨日会つたばかりの朱雀といつ女の子。

俺は朱雀に謝る。

必死に、謝る……

「『めんなさご』『めんなさご』『めんなさご』……」

え?

なんでこんな事になつてるかつて?

まあ、時をさかのぼること10分前。

櫻井家は引越しの荷物がまだ片付かないうちに朝を迎えた。

リビングへ行くと、俺以外の家族はもう起きて集まっていた。

「お、春彦おはよつ。親父はさっそく今日から仕事。

「はるちゃん、おはよ」母は親父の弁当作り。

「お兄ちゃん遅い」妹は朝7時からのアニメを見ている。

「ハル、よく眠れたか?」……あれ。一人多くね……?

リビングには父、母、妹 加えて同じ年くらいの女の子がいますか?

櫻井家は俺含めて4人家族だよ?

「朱雀さん、じゃあようしく頼むよ!」親父が言つて、弁当と鞄を片手に家を出た。

女の子はこつこつ頷き、親父を見送る。

そうだった……!

昨日会つた変なスパツツ女が、我が家に住みつくなつたんだつた……!!

「つてオイ、スパツツ! なんで当たり前かのように入ん家に居座つてんだよ!」

俺はイライラをぶちまけてから、ハツと氣付いた。

スパツツ女と目線が合つて、背筋に冷たいものが伝つたのだ。

あ、やばいやばいやばいやばい……!

スパツツ女 ジャない、朱雀さんの眉間にシワがつ!
や、やばいやばいやばい…… 鉄扇取り出さうとしてる……。

忘れてた。

つい数時間前も危険なオーラを放つてたじやん。
「こいつ、本気で俺の首落とす気だ。

な、何とかしないとい…

思いつく限りの選択肢は3つ。

- 1・戦う (……俺、武器無いわ)
- 2・逃げる (……え、ビックく?!)
- 3・必死に謝る (……俺のプライドが許さない)

もちろん生存率の高い選択肢を選ぶぞ。

そんなわけで

冒頭に戻る。

「『あなたをこうめあなたをこうめあなたをこうめ…』」

プライドなどへこむでも諂へてやるぜ。 (ぐあん)

「少年、そのような陳腐な言葉で許しを請おうなどとは…」

「そお。俺の必死さは朱雀さんには伝つていなことない。」
「ばー！」

「うう嘘ウソ！　冗談だつて！　ブラックジョークだぜ？！」

自分で言つのもなんだけど……すげえ苦しまぎれ。
これじゃあ朱雀さんを何とかするのは無理だわ。
こりや死んだな、俺。

ところが、朱雀さんは首を少しあげて、一言。

「……ふ、ふう、ふううへ……？　うむ。そういうことなら、仕方
ないな……」

あ、もしかしてカタカナ苦手なんだ?
絶対意味分かってないよね?

そんなわけでどうやら、俺助かつたようですね！－

5・横文字は最大の武器（後書き）

私も横文字苦手です（笑）

6・教訓その一

ほひなく、思い出したよつて朱雀さんが切り出した。

「それはやうと、ハル！ 私はす、す・すぱ・・すぱなんたらなど
ではない。

『千年王城』の朱雀だ」

腰に手を当てて主張する朱雀さん。

“スパツツ”って言えてねえし。

「へー・・・みひしく。ヒヒひで、朱雀は家に帰らなくていいのか
よ？

お母さん心配してんじやねえの？」

当然の質問だよな。

にしても『千年王城の』、って意味分からねえ。

「私の住処はこの都だ。それに母とは何の事だ？ わたしは南を司
る四神の『朱雀』だぞ？」

……ん？！

はい。ありえねえ自己紹介、キタ――――――！

ど、どうひつひめばいいんでしょつか？　どうひつゆつか、どう

を？

え～と……取りあえず……

「人間じゃないの？」

「当たり前だろ？！」

朱雀さん、ノクリと頷く。

俺、その場に固まる。

.....

そそそ、そんなバカなあああああーー！

春は変なやつが出てくるつてこつたび、こつはそんな可憐らしくもんじゃねえ。

(ま、顔はかわいいけどさ)

この悪魔のようなスペツツ女　もとい朱雀さんは自分は人間じゃないって言い張るし。

.....取りあえず、そことのところは触れないでおこう。

朱雀さんが俺に付きまという理由が何なのかは分からない。だが、分かつたことが一つだけあるー。

それは
。

教訓その一【朱雀に逆らうべからず】

俺は間違いなく彼女に主導権を奪われた。
一体いつまで我が家に居座るつもりだ？

と、まあこんな感じで俺の朝ははじまった。
そう、今はまだ朝。
一日が始まつたばかりなんだよな……
なのに、何でこんなに疲れているんだうつ、俺。（う、うう、ぐ
すつ

6・教訓その一（後書き）

短くてすいません・・・
毎日ひやできたらいいなと思っています^_^

7・教訓その一（前書き）

注) やつとだけ長いです。
時間無いし、面倒だな～って場合に空いた時間にでも読んでくれ
ださい(笑)

7・教訓その一

丁度賑いはじめる午前10時。

京都のまちを眺めながら、目的地の四越^テパートを手指して歩く

俺……と、朱雀さん。

はたから見ると、俺たちはボーテーでもしているように見えるだろくな。

だけど、そんなんじゃあない！

「ばかもの！ ここの通りは危ないのだ。迂回^{うかい}していくぞ」

「ちょ、ちょい待ち！ これで何度もだよ？！ これじゃあいつまでたつても四越^テパートに着かねえんだけど…」

「こり、ハル！ 」の橋は真ん中を歩くのだ。端を歩くと引つ張られるぞ」

「ひ、引っ張ら……ええ？！ 一体何に？！」

「あ、ハル……。そういうえばここりー帯は青龍の縄張りであった……。櫻井家に戻るぞ」

「ええー？！ 俺、四越^テパートに行きたいんですけど」

で、結局四越^テパートにたどり着かないまま昼を迎へ、公園のベンチで一休み。

クソ朱雀め。

なにが『京都親善大使ホニヤララ』だ。全然役に立つてねえじゃんか！！！
(口に出しては言えないけど)

「なあ朱雀、通りが危ないだの橋の真ん中歩けだの、青龍がどいつも
か オカルト系好きなの？」

絶対そつだろ。

「お、おか、る？…………つ、うむ……そんな事よりも、落ち着いた
とはこいには魔都だぞ。氣を緩めるわけにはいかないのだ」

あ、質問サラシとながしゃがつた。

「ふつ。現代に魔都つて…………！」

「の子、重症だと思つよ。うん。

俺は軽く鼻で笑つてから、しまつた！ と、心中で絶叫。
一気に血の気が引いて、変な汗が滝のように流れている。

「今、わたしを馬鹿にしたのか……？ 今、わたしを愚弄しただろ
う……？」

や、やばくね？

なんか、やばくね？

朱雀さんの握った拳が小刻みに震える。ま、間違いなく立腹だつ！

俺の目の前に般若が！顔が怖いんですがつ。
鉄扇しまつて、しまつてくださいっ！

.....

一度キレると、謝つたくらいじや怒りは納まらないらしい。

その後俺は彼女の機嫌を直すべく、そりやもう頑張ったさ！ 財布が軽くなるまで頑張ったさ…！

(アイスおーじつたり、クレープおーじつたり、たい焼きおーじつたりetc.....)

だつて首が落ちるか落ちないかの瀬戸際ですから…！

命は金に代えられねえ……だけどつ。う、ううつ。俺のなけなしの小遣いが…。

ガチャッ

「奥方、只今戻りました」

「…………ただいま」

「おかえりなさい～朱雀ちゃん、はるちゃん
「おかえりい スザクちゃん！ あ、お兄ちゃんどつたつだ？ テ
ートは 「

俺たちが家に着いたのは夜7時。

あれからも、あの道がダメ・この橋はダメって散々振り回される始末。

おかげ様ですっかり夜になつたぜ？

母に『ちゃん付け』されても、つっこむ気力、ゼロだ。
秋奈にからかわれてもジャイアントスイングひとつすら、かませねえ。

つ、疲れたあ……

あ、スパツツ女について一つ田の教訓。

教訓その一【朱雀の前で含み笑いするべからず】

……今日は俺、もつ寝ます！（ぐすん）

8・リヒンケの中心で悲しき願いを叫ぶ

まぶしい　もう朝か

「答えは2番の“ねつちょりマツモ”だと思ったのだがな～」「それ、おじいよ！一応“鼻ちょいちゃんの三郎”に関係あるもん」

「やはりわたしあさがれがこの三角関係の諸悪だと思つが」「うんうん。でも、みかんも捨てがたいよね？」

あと、5分だけ

つて！

「この状況で寝てられつかよ!!」
辯の部屋（妹の部屋）の余話がすんごい意味不明で怪しいんです

が。

秋奈と話してゐのつて、たぶん朱雀だ。いや絶対朱雀だ。

いやいやいや、別に誰と話そつがどうだつていこや。

『ねつちよりマリモ』って何?!

俺の寝起きは最悪。

秋奈と朱雀の笑い声で起されたなんてい

あ、まだいねれこ

そんなこんなで騒々しく俺の一曰がはじまる。

「おはよ春彦」俺に挨拶した後、親父はすぐに出勤。
「おはよ、はるちゃん」母は食卓テーブルに3人分の朝食を用意している。

「お兄ちゃん比利だよ」秋奈、黙れ。
「お早う、ハル」……やつぱりまだいたか。

さつさと自分の家に帰れ、
スパツツ女め。

つてのまぢかの心の中でつぶやくだけだな。

口に出したら最後。俺の人生はわずか14年で潰えるだろう。

「才八三」

俺、なんかちよつと悲しくなつてきただな……（ぐすん。

「あ、そうそう。明日あさひやん入学式よね？ さぬけやんも始業式明日でしょ？」

母さんが急に思い出したように切り出した。
わへ、ついに明日から学校なのだ。

「俺は始業式の後授業あるし、秋奈に付いててやれよ
「でもね～せつかく新しい学校だし、はるかやんの担任の先生とか
こじら挨拶しなきゃ」

挨拶は秋奈と同じ時にすりやあいいだりうがー（同じ中学なんだ
し）

「いや、いじよ別に」
「ダメよおー 最初が肝心なのよ？」

こいつもこれだ。どんなに反論しようが母には効かないし。

「じゃあ、わたしがハルの挨拶役をしよう」

俺と、妹と、母の間に割り込んできた声の主はもひりさん、朱雀。

「あら、朱雀ちゃん助かるわあ～
「これも大使の務め、奥方が苦労する」とはないぞ」

つて、オイイ！！

「ちよおつと待つたア！ なんで朱雀が母さんの代わりに来るわけ？！ それは絶つ対反対だか？」

言いかけたその時、俺は言葉に詰まる。

「ハル、続きを言つてみる。よく聞こえなかつたが？」

朱雀さんが鉄扇を片手に持ち、もう一方の手にパン！パン！ と叩きつけている。

顔は笑つてゐるけど、こめかみ付近に青筋がつ！

あわわわわ。

やばいやばいやばい。

マジでやばいよ、ハル。

「……い、いえつ！ ザヒ、お願ひしますつ……！」

俺の言葉に朱雀さんは満面の笑みで頷く。
つまりだ。

始業式の日に、このスペツツ女が学校に来て、母の代わりに教師たちに挨拶をするつて事だ。

「ああ、誰か助けてください！」

8・ロヒングの中心で悲しき願いを叫ぶ（後書き）

最後のハルの叫びは、森山未来くん風に叫びついだ。 （笑）

9・ハル、学校へ行く

ついにこの日が来てしまった。

新たな学校、京都市立武城たけじ中学校

山の麓に建つ、歴史のある学校だそうだ。
校舎は実際、ボロい。

待ちに待った入学式が今日。もちろん、妹の秋奈にとって……だ
けどね。

俺は3年生になるため、始業式の後には授業が待っている。
式、つていつも実際は担任の挨拶や新学期に向けての軽い説明
のみで、クラス替えはしてないから、皆なじみの顔だろうし。

転人生の俺だけが緊張だよ……

学校に着くと、先に母と秋奈は入学式の行われる体育館へ行つち
まつた。

俺は一人職員室があ。

長い廊下を通つて、とうとうたどり着いた職員室のドアを、恐る
恐る開ける。

瞬間。

目の前の光景に俺は絶句した。

.....

「いやあ、3・5の生徒はみんな明るくて元気な子が多いから、何も心配は要りませんよ！」

「つむ。くれぐれもハルを宜しく頼むぞ。」

「はっはっは！まあ安心してください、スザクさん

職員室の来客用革張りソファーにでん。と座る朱雀さん。向かい合わせのやや質素なイス（素材ポリウレタン使用）に座っている、ジャージを着た教師と楽しげに会話している……

ええええ？！

「ん、ハルではないか。どうした？ そんなとこ立ったままで

俺に気付いた朱雀さんがキョトンとした顔で話しかけてきた。

『どうした？』 じゃねえよ！――

お前がどうしたんだよ？！

ホントに朱雀さん、学校に来ちゃったよ――！

「おっ、君が櫻井君だね？ いやあ、今スザクさんから話を聞いていたところだよ」

あ。先生ですね？

……一体そいつから何を聞いたんですか。

「僕は櫻井君が入るクラス、3・5の担任の小山だ。分からぬことがあつたら、なんでも聞いてくれよ」

じゃあ、遠慮なく。

何で不審者を捕まえないんです？ 先生の目の前にいるスペツチ女はどう見ても不審人物だろうが！ 生徒や保護者には見えねえだろ？ があつー！

「……ハル、何か言いたげな顔ではないか？」

朱雀さんが鋭い目線を俺に向けてくる。

心の中で不満を叫ぶことができなくなつたら、俺 泣きますよ？（ぐすつ。

「ま、まさかあ～。それは、ホラ、あ、新しい学校だし、緊張するな～……って」

俺の苦しまぎれの言い訳を聞いた朱雀さんはにっこりと微笑む。嫌な予感がするんですが。

「何も緊張などする必要は無い、私がハルの側に付いていてやるからな

いやいやいや… 遠慮します！ 土下座でも向でもするから、家に帰つてください——ツ！

うつ……。すげえドキドキする。

ああっ、テンション低いクラスだったら俺馴染めるかな。

朝のHRで、一通り担任の小山先生が話しあわせた後、俺が呼ばれて自己紹介をする。

転入生のお決まりのパターンだよな。

そんなわけで、俺は教室のドアの前で一人緊張しているワケだ。

「入ってきてくれ！」

ドアの向こうで小山先生に呼ばれ、ドアに手をかけようとしたその時。

俺より先にドアを開けて中へ入っていく人物。

堂々と、颯爽と中へ入っていく姿を俺は廊下から呆然と見つめる

その人物はもちろん、

朱雀だあ……

ちょっと待てええ！

出てくる場所、違うだろ？

職員室にいたのは、まあ、許すよ？

だけど、ここの場面は違つだらうねーー！

教室がざわめきだしたけど、当然だと想ひ。うん。

「」学友の方々、本日よつ小山殿の門下になる櫻井 春彦に何卒親切にしてやつていただきたい」 朱雀さん、深々と頭を下げる。

なんでお前が出てきて俺の代わりに挨拶するんだ？ いやがらせか？！

「みんな、彼女は・・ええと・・？ 転入生の櫻井君の、まあなんだ・・・スザクさんだ」

先生、朱雀のこといまいち分かつてないのにじつとかまとめましたね。

「スザクさんではない。千年王城の朱雀だ！」

朱雀さん、余計話がこんがらかるから、やめやーー！

「櫻井君、中に入つてくれ

クラスはすでに静まり返つていて、おそらく朱雀の登場でドン引きしたんだろう。

すげえ入りにくいくらいですが！！

「……あの、はじめまして……東京から来た、櫻井 春彦です……

ああ、緊張も不安もどつかへ行つちまつたぜ。

スパツツ女のせいでテンションガタ落ちだし。

「ハル、いつもの元気はどうしたのだ？」言つて、朱雀が横で不思議そうに俺の顔を覗き込んでいた。

てめえのせいだつての！

最初が肝心だからつて一生懸命挨拶のシユミレーショんまでしてたつてのに、こいつのおかげで……くわおつー（ぐすん）。

「よひしへお願ひしますつつ！…」

開き直つた俺はこれから始まる新生活に不安を抱きながら、ありつたけのボリュームで怒鳴つた。いや、怒つてたわけじゃあないけど。

はい、もうやけくそに近いです。

下げた頭をそつと上げてみる。

皆が顔を見合させ無言で俺を見つめ、教室はシーン、としていた。

当たり前かあ……

「 イエーイ！ ようこそ 3・5へー！ まあ仲良くなつたらいいが
えー 」

突然一人の男子学生がイスの上に立つて、大声で挨拶を返してき

た。

それに便乗して一斉に歯が騒ぐ出す。

「うひひ、お前らー、ちょっと騒ぎすぎだぞ」先生の注意もそっちのけで、クラス全体が盛り上がってる。

あ、あれ？ いつゆうソーリか？

「ハル・・・良い学級のようだな」

朱雀が珍しく目を細めて、やさしく微笑んだ。
いつもこんな顔だつたら、かわいいんだけどなあ。

「うん。なんか、すげえホッとした・・・」

感想は本当にこの通りだ。

こっちにきて、色々不安が多いせいと緊張しつぱなしだったんだ。
だけど、この明るいクラスを見ていて、心にかかるモヤがだん
だん晴れてきたのが分かる。

どうやら、学校だけは、楽しくやっていけそうだ。

10・人間万事塞翁が馬（後書き）

【人間万事塞翁が馬（一般的には塞翁が馬）】：人生思いがけないことが不幸につながったり、幸福を招いたりするので、誰にも予測はつかないという事。

辞書を開いて調べたので、一つ賢くなつた気分です（笑）

11・こまかく、むじりやんぱく風。

「俺、松井 謙吾ー！よろしくなー」

「俺はリョウ。この学校つて標準語しゃべるやつ多っこから安心しりよー！」

「ちよ、押すなって！俺だつてハルと話してえんだからー。」

HRが終つてからは俺の周りはこんな感じだ。
皆良いやつばっかでよかつたと、心底思つ。

「ねえねえ、櫻井君つてかっこよくない？..」

「後で声かけてみよつかあー」

え、マジで？

そんな朝のあたたかい交流も、授業開始のチャイムで終わりだ。
今日は入学式が体育館であるといつこともあり、3時限目で授業
は終わり。

1時限目の国語の授業。

「ん？ どうした・・・転校生の櫻井。ノートを取らなきゃダメだ
う」

国語教師からの指摘で俺はドキッとする。
ノートなんて、はなから持つてきていなイワケだし。

「すいません、家に……忘れてきたんです」

俺の言い訳を聞いて、先生は仕方ないな、といった表情で見逃してくれた。

転校生でよかつた――！――

「ばか者、なぜ事前に四越百貨店で文具を揃えておかなかつたのだ」

4

廊下側の窓から、こつそり顔を出した朱雀さんが小声で話しかけてきた。

四越百貨店……あ。デパートつて言えないのか。

つてか、まだいたのか！

とか。

四越デパートに行けなかつたのつて、お前のせいだらうがあ――

「こんな調子で2时限・3时限の授業が终つてゆく。まあ、とにかく朱雀の影は见えてたけど。

「おわったあー！ な、ハル！ これから遊びにいかね？」

下校時間に話しかけてきたのはクラス一の元氣者・謙吾だ。鞄片手に好奇の眼差しを向けてくる。

「わりつ、俺まだ家の片付けとかあるか?」……「めん、今度な!」

肩をすくめて両手を合わせて謝る俺。

残念そうな顔を見せた後、謙吾は「やつやつ」となり、仕方ねーよな。じゃ、また明日な！」言つて、手を振り教室を出て行く。
……ホントいいやつだ。

「ハル、では家に戻るが」

廊下で待つていたのは、朱雀。
いなくなつていればいいな、なんて、淡い期待を持つもんじゃあねえな。

つーか、『嫌だ』なんて言えるわけねえだろ？

生徒たちは早めに学校を出て行つたので、廊下にはほとんど生徒がいない。

だだつ広く感じる廊下を、俺と朱雀が急ぐわけでもなく歩き出す。
その時、俺たちの目の前に、茶髪・耳にピアス、胸元を開けたYシャツ・ちょっとダブついたズボンの、見るからにチンピラ風のあんちゃんがふと現れた。

いやいや、中学校にいちゃいけないだら、この兄ちゃん。

11・いまや、むしの風。(後書き)

なんだか、読んでくれている人が増えてきて嬉しくなつてきました
いつも読んでくれている方た、指摘や感想があれば書きこんでや
つてください。妄想力が高まります(笑)

12・なつかしい、ふゆせうじにかえいましょう。

そのチンピラ風のあんちゃんは、いかにもガラの悪そうな歩き方で俺たちに近づいて来た。

効果音にするべつた、べつた、べつた……って具合か。

「わあ……近づきたくねえ。

そう思つた、瞬間。

チンピラ風あんちゃんと目が合つてしまつた！

「わっ！」

「よう、そこのガキ」

俺はいきなり声を掛けられ、ビクーッと肩が動いてしまつ。しかも『ガキ』って？！

「ふうん、朱雀に入られるとは、大したガキじゃねえか」

チンピラ風あんちゃんは俺を馬鹿にするよつに、口元に軽薄な笑みを浮かべながら、ジロジロと眺めまわす。

男にじっくり見られて気分が良いはずねえ！（キレイなお姉さんなら別だけど）

そんな時、俺の後ろにいた朱雀が口を挟んでくる。

「玄武、口の聞き方をわきまえろ」

朱雀の刺を含んだ言葉に思わず俺は後ろを振り返った。
「……、朱雀の知り合い？（しかもなぜに不機嫌……？）

「ハツ。どうしゃべるうと俺の勝手だ。それに、無断で領地に入り込んできたのはテメェの方だろうがあー、ああ？！」

チンピラ風あんちゃん、もとい『玄武』が凄んできた。
「うええ……

「黙れ、小童。貴様にいちいち断りを入れるとでも言つつもりか

朱雀さん……どう見てもあんたの方が『小童』だと思いますが。

それにして、なんだろう……？

しゃべり方とか、いつもの朱雀なんだけど。

今の朱雀を見ていると、背筋がゾクゾクするような

なんだか、怖い。

しばし睨みあつていた一人だが、面倒くさくなつたのか玄武がため息をつきながら、目線を外す。

「まあー、いいや。朱雀なんかに用はねえし、つーか暗くなつてき
たからもう帰るわあ。じゃあまたな、ガキ」

チンピラ風のあんちゃんは手をひらひらと振ると、踵を返して再び歩き出し、よたよた階段を降つて俺たちの前から去つて行つた。

『暗くなつてきたから』つて、あんた小学生かよ？

「朱雀……なんだよ、あの人」

「うむ、まあ心配するな、あやつに手出しませぬ。わたしが付いていてやるからな」

軽く流したあと、につこり微笑む朱雀はさつきのピコピコした雰囲気がすっかり消えていた。

つて、までよ？

「『付いていてやる』つてのは、もしかして……」「嫌な予感がするんですが。

「もちろん毎日この学校とやらに付いてきてやる。と言つてこるものだ！」

朱雀さん、満面の笑みなんですが。

それはやめてくれえええ！！

俺の……俺の唯一の楽しい学校生活がつ……！

朱雀さんのおかげで、たつた一つのオアシスが無くなる可能性

大ですが。（うううう……ぐすん。

12・なつかしい、ふみせんじかえつましょ。 (後書き)

私が子供の頃の標識には「なつかしい、ふみせんじ」と書いてありました。

今どきの小学生に聞いてみたら、「なつかしい、ふみせんじ」だそ

うです。(やんなつ)

・・・暗くなつたら家に帰りましょー!

13・ハル+

俺は櫻井 春彦。

家では俺に安息は無い。

なぜかとゆうと……

つるさい妹の秋奈と、謎のスパツツ女・朱雀がリビングを占拠し、我が家で気ままに生活しているからだ。

「きやはははははっ！」 秋奈め、またテレビ見て爆笑してやがる。
「あははは（ひ）ほつ、（ひ）ほつ！」 スパツツ女め、遠慮といつもの
はないのか？ あ、むせた。

俺の安らぎの場が……

しかし！ 家がダメでも学校がある！！
すげえいい奴らの集まる3・5こそこが唯一の安らぎの場。

の、はずだったのに。

ガラツ

「来た来た。おはよーハル！ 今日は忘れ物してねえだろ？」「

「おす、謙吾。昨日は仕方なかつたんだよつー」

ガラツ

「あつ おはよー スザクちゃん 」

「つむ。早いな、謙吾殿」

……

うん……

説明すると、学校に登校する俺 + 朱雀。

なぜか学校に付いて行くと言つて聞かない朱雀。

彼女に逆らえない俺は、一緒に登校して來たわけです。

俺の……唯一の『女らぎの場』が……（ぐすん。

まあ、授業中は俺に配慮してくれてるのか、朱雀は一人屋上で時間潰しているようだ。

休み時間のたびに校舎を歩き回っているみたいだけど。真っ赤な髪に赤い着物が見たくなくても田に入る。

学校中の生徒や教師が、これといって朱雀の存在を気にしてないのが不思議だ。

こんな不審人物を受け入れるとは、みんな、心が広くな?

……俺の心が狭いワケ?

そんな学校生活。

クラスでは、謙吾とリョウが一番仲の良い友達だ。

謙吾は元気がよくて、面倒見が良い。

リョウはクールで表裏のない性格。

2人といふと氣を遣うこともなく、安心するんだ。

「本当に良い友に出会えてよかつたな、ハル」

俺の横でにっこり微笑みながら話しかけるのは　　出た。朱雀だ。

「いや、俺たちもこんなかわいい」と呟えてよかつたよおースザク
ちゃん」

「だよな。（ちょっと変わってるけど）かわいいし、羨ましいぜ、
ハル」

朱雀にちょっかいかけているのが謙吾。

悪戯っぽい笑みを浮かべ、俺をからかっているのが、リョウ。

はあ。朱雀がいなけりやもつとよかつたのこそ。

ハッ！！

うつかり流しちまつといだつたぜ。

イヤイヤ、ちよつと3節目前に戻ってくれる？
2人の会話の内容、おかしいって！

謙吾とショウはなにも朱雀のことを分かつてねえ！

奴がどれだけ暴君であるかを。

奴が常に恐怖政治を行つてゐることを。

奴がただのかわいい女の子じゃないことを・・・

「ハル、なにか言いたいことでもあるのか？ わたしになにがあるのか？」

朱雀さんは俺が心の中でぶつぶつ呟いてると、ダイレクトに核心を突いてきた。

朱雀さん……あなたは細 数子ですか？
それともサトラレですか？

「イイエ、なんにもナイテス……」（うう、ぐす、ぐす。

俺は今日も心の中で涙する。

14・玄武現る・教訓そのII

授業が終わり、謙吾たちと別れた後、廊下から不意に足音が鳴り響いた。

それも、ぺたん。ぺたん。と、だらしない足音が。

「玄武か」

朱雀がつぶやく。

俺は足音の響く先を見ると、そこにほじこから現れたのか、例のチンピラ風あんちゃん もとい、玄武が歩いてきた。

「よひ、ガキ。と、アカスズメ」

相変わらずの不敵な笑みを浮かべ、玄武が声をかけてくる。

俺の隣にいる朱雀は、なにやらこいつも以上にものっそい怖い顔をしているんですね。
やっぱいつて、その顔を謙吾が見たら絶対悲しむよ？

「言つてくれるではないか、山蜥蜴めがトカゲ」

朱雀さんがおもむろに、懐から鉄扇を取り出し、俺の前で初めて鉄扇を開いた。

ジャララッ

重々しくて、鉄と鉄が擦れる金属音。

つてか、武器データー———!.

静かにブチ切れてる? 朱雀さん、キレてるよね?!

「ああん? 闘やんのか、ドチビー!」

玄武がスイッチが入ったかのよつて、ドスをきかせた声でずんずん近づいてくるではないか。

その左手にはよく映画やドラマで見かける黒いブツが。

……うん。どいつも見ても銃だよ、アレ。
銃だな。うん。

「ちよつと待つたあああああ——!」

この物語にそんな血なまぐさに展開はいらねえよ——。

誰も期待なんてしないと思つよ?!

闘つたら、間違いなくどっちかが落命しますよ?

「邪魔をするな、ハル」 朱雀さんが口を尖らせ、キッと俺を睨んだ。

「え、久々にストレス発散しようとかと思つたのによお」 玄武が腰に手を当てながら俺に不満そうな視線を送る。

どうやら俺が間に割つて入つたおかげで、2人のボルテージは一気に下がつてしまつたようだ。

え、俺が悪いの？

まったく。

殺し合いで発展しちになつたり、あつけなくやる氣をなくした

なんなんだよ、ここからは？

「あのね、朱雀。子供がそつぬつ危ないモン持つのはよくないと思つぜ？」

「ハル、わたしを馬鹿にするよつな言葉遣いはするなよ？」

朱雀さんが微笑んで俺を諭す。

その満面の笑顔が、あまりにも不自然なんですが。

そんな時、例の鉄扇が再び重たい音を響かせた。

玄武に向けられるはずだつたそれは、ことあるごとに……

「分かりました分かりました分かりましたっ、だから開いたままの鉄扇首元に突きつけるのやめてください！――」

俺かよ――

そんな俺と朱雀のやりとりを見ていた玄武が急に笑い出す。

「アハハハハツ！　お前、変なガキだな！　オイ、名前は？」

「えつ……？　あの、春彦です……」

「これ以上変な人と知り合いになりたくないんですけど。変人は朱雀だけで十分なんすけど。

「ハルヒコ、ね……俺は千年王城の玄武だ。まあ、仲良くなつていこうぜ」

玄武は初めてにっこり微笑む。

いやいや、それよりもまた出てきたよ？　『千年王城の』って。何か怪しい組織なのか？

と、まあこれでひとまず朱雀との戦いが終わり、ひと段落……

そして、朱雀の教訓三つ目ができました。

教訓その三【朱雀を「アカスズメ」と呼ぶべからず】

意味は謎だが、そう呼んだら間違いなく命はねえな……つん。

14・玄武現る・教訓そのIII（後書き）

現在ブログ作りに悪戦苦闘中・・・^_^；

落ち着いたらブログの方でも物語を載せようと考へ中です（笑）挿絵付きにしたいなあ・・・

（後書きなのに全然関係ない話ですいません【汗】）

15・Hキノ「ラックスに氣をつけろー」

ねむい……

あ、今日は祝日か……

まだ寝てらるるじやん……

毎まで寝てよ……

……

「…………うむ。そりやうわけなのだ」「

「ほほう、それは実に有意義ですね」

「まあ、それは建前として本音を言えば彼の少年で殿つぶしきして

いるのだ」「

「やはり何も無こと退屈で仕方あつませんしな

なんか、気になる内容の話し声が聞こえる……

誰だ？ 一人は誰がしゃべってるか分かる。
あえて言つと、朱雀だ。

もう一人は誰だ？ 全然聞いたことのない声だし。
しゃべり方がおっさんくさい。
(まあ朱雀もだけど)

気になる……

「ハルのやつは勘が鈍いゆえ、すぐには気付かぬな」

!!

やっぱ、俺の悪口だつたのかあ――――！
このひ、朱雀めえ……！

ついに力チンときた俺は部屋のドアを勢いよく開け、2階の通路で人の悪口を平氣でしゃべる朱雀に怒鳴る。

「悪口言いたいや、もつと聞こえないよつに話せええ――！」

座りながら話し込んでいる2人はびっくりしたのか、田を丸くして俺を見上げた。

その光景を見た俺も、田を丸くして2人を見下ろした。

2人を……

2人……?

……いや、1人+1匹?

うん。1人と1匹だね。こりや。

「えええええ、な、なに? なんだよ、そいつー!」

俺はホントにビビッた。
本当にビビッた。

朱雀の隣に座つてたのは キツネだ。(コーン)

うそお! 俺ん家ペット禁止だよ?

いや! そんな事よりも、エキノコツクス移るんじやねえの?!

「馬鹿者、わしゃそんなこ汚くないわい!」 目の前のちょっと薄汚れたキツネが言つ。

「あ、スンマセン……」 俺、謝る。

「ハル、この者は稻荷狐の『権兵衛』だ。わたしの茶飲み友達なのだ」 朱雀が話す。

祝日の朝、俺ん家に謎のしゃべるキツネ、『権兵衛』さんが現れたのである……
エキノコツクスは大丈夫なんだろうか……?

16・どんべえ帰る

俺はもう、朱雀にどんな友達がいようと何も言わねえ。

エイリアンが友達でも、幽霊が友達でも、ネツーが友達でも。
(ただし家に呼ぶのだけはやめてくれ)

だけど、しゃべるキツネ……って。

動物が言葉を話すって漫画ではベターだよな。

まあ実際ありえねえし。

俺の知ってる限り、言葉を話せるのは人間と鳥くらいだ。
もしかして、キツネも話せたりして。それを知らなかつたの俺だけとか?

キツネ：哺乳綱ネコ目イヌ科、キツネ亜種キツネ属に属する動物の
総称である。

(動物大図鑑MAX抜粋)

いやいやいや、やっぱキツネには無理だつて！

取りあえず……会話するか……

「あの、俺ん家に何が用つすか？ えつと、名前なんだっけ……？
どんべえ？」

「お前さんのおみそは空っぽか？ わしゃ 権兵衛だ！」

「いのひ……！ キツネのくせに！…

人間よりキツネの方が脳みそチツチエエくせに！…

「どんべえはな、お前に会いに来たのだよ、ハル」

朱雀さん、権兵衛さんの名前間違つてるから。

「俺に？」

「さよう、朱雀殿が見込んだ人間がいると、風の噂で聞きつけてな

朱雀つて、なんか偉いやつなのか？

「噂どおり、面白い人間じや」 権兵衛さんは器用に前足を使つて
アゴをさすつてゐる。

「ふふひ。どんべえも興味がわいたか」 いやいや、朱雀さん普通
に間違つてゐつてば。

「さて、噂の人間を捕んだことだし、わしゃ社やしろに戻るとするわい」

権兵衛さんは脇に置いてあつた木の棒を掴み、杖の代わりに使つて2本の足で立ち上がつた。

「うつ、2本の足で……

え？

立てんのオ？！

「どんべえ、遠いとじるひり苦勞だつたな」 朱雀さん、もひきつて

やんねえよ？

「なんの、邪魔をしたのはわしのほひじや。土産を置いてゆくから、皆で食べなされ」

権兵衛さんが唐草模様の風呂敷を脇から取り、俺に手渡してきた。

「御二方、ではまた」

そう言つて、木の棒にくつついていた一枚の葉を額に乗せると、昔話の化け狐のよつこ

ボンッ！

といつ音と共に、権兵衛さんは忽然と姿を消した。
じつぜん

んなバカな！！

「ハル、どんべえがくれた土産が美味そつか見てみたい」

俺の持つている風呂敷を見つめながら朱雀が催促した。

「やっぱ、キツネのプレゼント……ついたら、いなり寿司とかかな

あ？

ちゅうと重いし、たくさん入ってそうだな。

お土産まで持つてくるなんて、権兵衛さんい **キツネ**じゃねえか。

風呂敷を床に置き、結び目をほどき、期待を込めて風呂敷を広げた。

ハラリ。

「ンギヤ

-----!

「ああっ馬鹿者！ 全部逃げてしまつたではないか！ ハル、倒れてないで早く捕まえろ！ せつかくのご馳走がもつたいたいのであるつ」

(チュー、チュー…)

説明すると……風呂敷の中身は……い、いなり寿司なんかじゃなかつた。

「皿で食べる」と置いていったお土産は

生きたネズミ………

風呂敷から逃げ出すネズミの大群は、マンションの10階を、駆

け……ま、まわ・る

(バタツ)

16・どんべえ帰る（後書き）

前に家の中でネズミを見かけました。

逃げたハムスターかと思って捕まえようとしたら、しつぽがつ…！

！（絶叫）

17・ミッション・インポッシブル

キーン　コーン
カーン　コーン

「次体育か……無理だつ、眠いし体動かないし」

権兵衛さんのせいであの後は大変だった。
分散して逃げまどうネズミたちを捕まえるのに夜中までかかつた
んだよ！」

「馬鹿者！　男子たるもの弱音を吐くななど女々しいぞ！」

休み時間に現れた朱雀。

お前に言われたかねえよ！！

昨日、俺が気絶した後の出来事だ。（分からなかつたら1-6に戻つて確認ヨロシク）

朱雀が俺の頬をひっぱたいて無理やり起こす。
ネズミを捕まえるよう指図。
俺はたつた一人でミッション開始。
うしろで見ていたはずの朱雀がいない。
必死に戦っている俺をよそに、朱雀はテレビを見て爆笑中。
もうやりたくねえ、自分の部屋に帰ろう。
そんな時「ピーン」と何かを感じる。
それは殺氣。

もちろん、ネズミ捕り続行。

深夜2時、無事ミツシヨン終了。

「ダメだつ、やつぱ俺帰つて寝るわ」

鞄をむんず。と掴み、教室を出よつとしたとき、謙吾とショウが自分達も帰ると言つ出した。

みんなでサボればこわくない！ つてことだ。

朱雀は学校に通う意味 자체分かつてないし、唯一の弱点を知つてから言つくるめるのは簡単なんだよな。

「今はメンタル的にキツいんだよ、だから今日せよもつ帰らひぜ、朱雀」

「め、め、めん・タロ……？ むべ……それは……家に帰るのは当然のことだな」

朱雀が冷や汗をかきながらつねずく。

「ふつ。ざまあみろ。

分かつてねえのバレバレですよ、朱雀さん！」

「じゃあ、みんなで帰らひつへ

なぜか謙吾が一人はしゃぐ。
まあ、謙吾はただ単に朱雀と一緒に帰れるから嬉しいんだひづけ
ど。

帰り道、バス停までの距離を歩く俺と、朱雀と、謙吾と、リョウ。

「ねえねえ、スザクちゃんは誕生日いつ?」謙吾、顔が一やけて変だぞ。

「誕生日? わたしにそんなものはない」ためらこなくサクッと答えるね。

「世の中にはいつ・どこで生まれたのか分かんねえ奴だっているさ」「一瞬止まりかけた会話をリョウがサラリとまとめる。ってゆうか、例えが重くね?

「ちえつ。じやあ、ハルは?」謙吾、俺はおまけ的扱いですか?
「俺?明日なんだよね」

言つた後、謙吾とリョウは田を輝かせて言つ。
明日、祝いにいくからと。

その言葉に心底嬉しくなつて、自然と笑みがこぼれる……が。
次の瞬間、浮かべた笑みが苦いものへと変わっていく。

明日は俺の誕生日。

誕生日だからといって、毎年特別な事はしていない。

だが、今年は違う!

穏やかな誕生日になるとは思えねえ……なぜなら。

この迷惑スペツツ女、朱雀がいるから、だー

.....ああ、嫌な予感がする

17・『ミッション・インポッシブル（後書き）

映画の『ミッション・インポッシブル』ではあります。『ミッション・インポッシブル』です。

『…』ではなくて、『…』です。特に意味はありません…スマセン…：

1-8・まつめの祭典（縁結め）

こいつがよつね十郎のやつだ…【汗】

ついに今日とこひ日がやつて來た。

櫻井 春彦（14）（15）

わづ。今日は俺の誕生日なのだ……

「ただいまー」

「只今戻つたぞ」

俺は玄関で靴を脱ぎ捨てたまま、リビングへ進む。

朱雀はなぜか自分の草履を懷にしまって、リビングへあがる。

草履を懷にって……あなたは木下藤吉郎（かの有名な秀吉）さんですか？

「はるちゃん、朱雀ちゃんおかえりなさい。早くつたのねえ

キッチンに向かつたまま、母が弾んだ声で返事を返してきた。

あ、いい匂いがする。

「今日は午前授業だつたんだ、学校が早く終つてラッキーだつたぜ

「今日は午前で皆出て行くよう言われたのだ。なぜだ！ わたしは給食が食べたかったのに……」

俺をよそに、一人悔しそうに顔をしかめる朱雀。

「朱雀ちゃん、機嫌をなおして！ 給食じゃないけど、今日は『』馳走を用意するから！」

「朱雀ちゃん、機嫌をなおして！ 給食じゃないけど、今日は『』馳走を用意するから？」

母が包丁をプラプラ振り回しながら笑顔で振り向く。

「おお 奥方が腕を振るうわけだな！」
「ヒイツ！ 母さん、分かったから包丁持つたまま腕を振るなあああー！」

サッククリ包丁が飛んできそつな勢いなんですが！

俺の真摯な叫びをよそに、そのまま母は上機嫌で再びキッキンと向き合つ。

も、いいや……

せつかく早く帰つてこれたんだし、一人でべーたらじょいつ……

午前授業つていいなあ、のんびりできる時間があるし。
うつむき妹の秋奈は、新しくできた友達と遊びに行つてゐるみたいだし。

「暇そだな、ハル」

ソファーにひっくり返ってダレていた俺に、朱雀が覗き込んでき
た。
び、びっくりしたあ。

つか……

安らぎのひとときを「暇」扱いですか？

「暇じやねえよ、安らぎを追い求めるのに俺は忙しいの」

ひっくり返ったまま、何か企んでいたその顔の朱雀を気にせず眼
を瞑る。

「ふふつ。遠慮は要らぬぞ、今日はハルの『誕生日』とやらではな
いか」

……えつ？ 遠慮しないよ？

「そうだけど。誕生日だからって特別な事しなくていいからなつ！」

俺はソファーからガバッと起き上がり、含み笑いをする朱雀に先
手を打つて、釘を刺す。

絶対何か企んでやがるな、こいつ。

「…………わ、わたしの善意を……蹂躪するつもりか？！」

はっ！－

し、しまったあ！－

顔を紅潮させ、ブルブル震えながら手にぎゅっと例の鉄扇を握り

締める朱雀さん。

今日は最強に怒ってるっ！！

やばい！

やばいやばい！

谷に言つ「やばす」！！

恥もへつたくれもねえ。

彼女の怒りを静めなければ、俺の命はねえ。

とにかく横文字だ！ なんでもいいから横文字を使え、俺！！

「ごめんなさい、ごめんなさいー そうですっ、アレです。今日は俺のバースディです！ メモリアルです！！ わあウレシイナア！」

何か違つ氣がするけど、そんな小せえコト構つてられるか！
俺は体裁より、命をとる！！

額にびっしり汗を浮かせて笑顔を作る俺は、朱雀の顔色をそ一つと伺つた。

「…………わたしの好意をつ…………」

未だ小さな肩を小刻みに震わせ、明らかにこめかみ付近に浮き上がる青筋。

そんなつ…………！ 横文字が効かない？！

朱雀さんの頭から湯気がつ。（出てるよつて見えるー。）

俺、
ピンチ！

1-9・正面の頭（じゆべ）と背面の頭（ひがしら）

今回の1-9は正面と背面で話になつてこまゝ。
「正面へ承ります」（ペーパー）

19・正直の頭（じつがし）に神宿る

俺はどいつもやら神の逆鱗に触れてしまったようだ。

神話や昔話でも、神の怒りを買った者の末路は

無残なもんだ。

俺はまさに神の怒りに触れてしまった。

脂汗が滝のように止めどなく流れ落ちる。

じつじよいつ

唯一の手段・横文字は効果無し。
予想外だ！

目の前で憤怒のオーラを放っている（よいつに見える）赤い髪のス
ーパーサイヤ人。

このまま猿にでも変化しそうな勢いだ。

だめだつ

全然解決策が思い浮かばねえ。

……じつする。

……じつする？！

……正直に謝るしか、ないな、」つや……

俺は両手を顔の前に合わせて、怒りの形相でずんずん近づいてくる朱雀さんに、謝った。

たぶん、はじめて本心から、謝った。

はじめて、朱雀に本心を言った。

「「めん！…………」「めん朱雀。ちょっと言いすぎた、かもしれません。朱雀が俺のために何かしてくれようとしてたら、ひどい事言つちまつたし、その…………」「めん」

きっと俺は今、情けない顔をしてるんだろうな。

言つて終えて朱雀の表情をうかがいつぶつと顔を上げた。じつやらまだ顔が怒つてゐる。

やっぱ、こんな謝り方じゃダメかあー……。

金色の田で俺を睨みつけながら、じつと佇む朱雀。たたず

長い長い沈黙を破つて、やつと一言彼女が呟いた。

「…………うむ。なら許す」

え？

アッサリ？

こんなアッサリ？！

朱雀は少しつむいて難しい顔をした後、一人玄関へ向かい、草履の紐を結びどこかへ出かけるようだ。

「では、ゆくぞハル！」

朱雀は先ほどとつて変わって、明るい声で俺に促した。

ちよつと待て、どこへ？！

つーかさつきの怒りはどうへ？！

「おい朱雀、なんで俺が

俺が一緒に行かなきゃなんねえんだよ。
と、言おうと思つた矢先。

朱雀は玄関のドアを開けながら決定打を一言。

「さつやと来ぬか。ほりつと（首を）落とされたくはないであらつ
？」

につこり微笑む彼女の笑顔は最高に可愛い。

冷徹なまでに辛辣な言葉を発する口はまさに悪魔。

俺は自称神と名乗る、スパツツを履いた悪魔に呪われているのだろうか？

19・正直の頭（じゆく）の宿る（べき）（後書き）

正直の頭に神宿る・正直な人は神様が見守つてくれる。

（ことわざ辞典 シリーズ1
3より）

人間正直にならなきやいけないですね…

20 ハルの誕生日（人力車現る）（前書き）

いつもよろほんの少し長めです、あめに見てやつてください^ ^ ;

20・ハルの誕生日（人力車現る）

朱雀は俺の手を引き、マンションの入り口で立ち止った。
曇下がりのここ一帯は車もさほど走っていない、閑静なまち並み。

朱雀がおもむろに、一本の指を使って口笛を鳴らす。

ピュイッ！

ん？ 犬でも呼ぶのか？

広いマンションの敷地には更に広い駐車場が備え付けられている。
そこから、俺たちの方へ何かが向かってくるではないか。

犬？ ではねえな。

車でも、自転車でもない。

俺は超低速で向かってくるそれを見て、バカみたいに口を開けつ
放しにしながら呆然と立ち尽くす……

「ねえ朱雀。人力車みたいなのが来たんだけど」

棒読みで質問する俺。

離れた距離からどんどん近づいてくる、人力車？

人力車なんて、さすが京都……？

「あれは、彦左衛門だ」

すっぱり答える朱雀さん。

つて、知り合いかよ！

俺たちの前にやっと着いた真っ赤な人力車。

それを轢くのは朱雀の友達（？）の彦左衛門さん。

「やあ朱雀殿、お久しぶりですね」

「うむ、達者であつたか？ 彦左衛門」

笑顔で挨拶を交わす2人は、どうやら久々の再会のようだな。

「おや、はじめまして坊ちゃん」

彦左衛門さんは丁寧にも深々と俺に挨拶をしてくれた。朱雀のダチつてろくなのがいねえから、ちょっと感動。

「あ、はじめまして……。俺、櫻井 春ひ……ん？」

ちょっと待て、あまりにも礼儀のある人だから見落としていたが

「あれ？ この頭にくつついてる折れた矢みたいなものは？」

……

まじまじと彼の頭を見つめてふと疑問が湧いたのだ。

俺は彦左衛門さんの頭の上に、弓道の矢がくっついているのに気がついた。

それも刺さっているように見えるんですが？

「わはは、坊ちゃんは田の付け所がよろしいなあ！」 彦左衛門さん、豪快に笑う。

「ハルはなかなかのもんであろう？ 宜しく頼むぞ、彦左衛門！」 朱雀さん、ニヤリと笑う。

「あ、はは……は……」 俺、2人に合わせて笑ってみる。

「つて、なんじゃそら――――！ ビック見てもこのおっさん、落ち武者に見えるんですけど――！」

「おっ、ハル坊は鋭いの。それとも拙者死んでから有名になつたか？ わはははは！」

説明しよう。

俺の目の前ででつかい声で笑っている40代（だと思つ）のおっ

さん、彦左衛門さん。

赤の布地で統一され、黒いフォルムが重厚感を醸し出す人力車を所有。

よりよれの着物に、ヘアスタイルはおそらく時代の先駆け。

頭頂は完全に剃られ、サイドから無造作につくられたロングヘアの黒髪が肩まで伸びる。

その、毛の無い頭部に刺さりこんでいる 矢。

矢が
……

矢が
……

ぎやあああああああ！ 頭に矢がブツ刺さつてる――？――！

21・ハルの誕生日（彦左衛門現る）

俺の顎が勝手に震えだして、ガチガチうるさいんですが。ついに顎が壊れたか？

「いやつは落ち武者の彦左衛門だ」

あえて丁寧に説明してくれる朱雀さん。落ち武者のおっさんはハニカミながら頷いた。

頭から血の気が猛烈な勢いで失せていくのが分かる。だつて、目の前のおっさんは間違いなく……
お、おおお、おばつ、おば・け……

ドタツ！

「ハル、なぜ泡を噴いて卒倒しているのだ？　さては新手の芸だな？」

「ああつ、ハル坊が白田を剥いている？！　何か怖ろしいものを見た顔だ……しつかりするんじやあ、ハル坊〜！！」

ガタツ　ガタン

わざかな振動と、風が覚醒を促す。

俺はうとうとゆっくりと目を開けた。

俺……今まで氣絶してたのか？

「ハル、目が覚めたようだな」

安堵に似たやわらかな笑みを浮かべた朱雀を見て、俺の心臓が少しだけ高鳴ってしまった。

不覚だつ！

俺はふと、自分が乗り物に乗つて移動していることに気付いた。時代劇に出てきそうなまち並、茶屋、たくさん観光客らしき人

「どこだ……ここ？」

乗り物のスペースはやけに狭く、椅子には真っ赤な布、そして目の前にはその乗り物を轢いている人物がいる。

「わっはっはあ！ ハル坊は実に面白い、皆が興味を抱くのも納得じや！」

笑い声の豪快な落ち武者、彦左衛門さん……だ。

とゆうことは、この乗り物は人力車で間違いねえな。うん。

「ふふつ　その通り、ハルは面白人間なのだ」

スペツツ女め、お前に言われたくはねーよ。

けど、やつあまではこの落ち武者のおっさんのが本気で怖かつたのに

笑つた声を聞いてると今は全然怖くない。

この振動、この風の匂い、朱雀のやわらかい声と彦左衛門さんの明るい声。

悪い気分じゃがない。

なんだらう、不思議と屈心地が、良いんだ。

「ふふつ、なにあれえ～」

「コスプレかなあ？ うけるう～」

俺が夢心地でこころを暖めていた時、すぐ近くから氣になる会話が聞こえてきた。

超低速で走る人力車は人より速く、チャリより遅い。

観光客らしき人たちが、俺たちの方を見ながらクスクス笑っているのだが……なんで？

笑つている田線の先をたどつてみると、せこには若いお姉さんが満面の笑顔で手を振る彦左衛門さんの姿。

あなた何やってんだああー！

「わはははー、どうも別嬪の女子を見るとつー」

そう言つて顔を赤らめたおひさん。ホントにお化けなのか？

「彦左衛門、では予定通り頼むぞ」

朱雀はなにやら俺に分からぬいよつて、彦左衛門さんこアイコンタクトを送つてゐる。

彼は拳を握り、親指だけを立ててビシッとポーズをとつて合図する。

すんげえ怪しくて不安になるんですけど……！

さつきまでの暖かい気持ちはどうへつたのか？
俺の誕生日は、予想通り残念な結果に終りそつだ……（ぐすん。

21 ハルの誕生日（彦左衛門現る）（後書き）

21は書き直しの連続でした…うう、まだ納得いかないかも…また修正かけるかもしれません【汗

22 ハルの誕生日（ひよりぬれ登場）（前書き）

22はひとつと感じるので、時間のある時にじっくり見になつてください。

22・ハルの誕生日（びちょぬれ登場）

「朱雀殿、ハル坊、着きましたぞ！」

彦左衛門さんは観光地から少しそれた裏街道で人力車を停める。俺たちの目の前には【甘味処 びちょぬれ庵】といつ、最悪のネーミングを持つ店が佇んでいるのだ。

「ハルにどうしても『この『びちょぬれせんせい』を食べさせてやりたかったのだ」

朱雀からの思いもよらぬ、（かなり）嬉しい言葉に俺は囁りいずも感動。

「朱雀……！」

につこり微笑む朱雀に俺のこころは再び暖かい気持ちでいっぱいになつた。

効果音を付けるなら（パアアア）かな、バックには乙女チックな花でもいいな。

いつもいつも迷惑と厄介事ばつかの朱雀。

だけど、ちゃんと俺の事、考えててくれてたんだ！－！

俺は朱雀と彦左衛門さんに腕を引っ張られて店内へ入った。

「こりっしゃいませえー、あら、スザクはんやないー今日も来てく

れはつたんですね

少し甲高い声で、和服にエプロンを着用した素朴感溢れる店員が、朱雀を見つけて挨拶してきた。

店員さんとすでに馴染みなのか、やるな……。

「うむ。びちよぬれニシド頼むぞ」

ビシッとろ本指を立てて、『さつくれ』とアピールする朱雀。ビシッと親指を立てて、『了解』と口々くつなく店員さん。

ビシッと……って、流行りてんの?

和風の内装は落ち着いた雰囲気で、朱雀が気に入ってるのも分かる。

観光地から少し外れてるから、人でこじつた返してるわけでもないし。

「お待ちかねですか～～、『びちよぬれぜんざい』さつお持ちしました～」

陶器の皿に乗った若草色の器。なかなか小洒落ている。

コーン、ヒテーブルに置かれたネーミングセンス最悪のゼンザイ。だけど、見た目と味は最高だ!

最高級の小豆であつて、黒い煌めきはながらブラックダイヤモンド!

皿玉のプリプリ感とほんのりした甘みはまさに、味のH-T革命や～!

つて、何やつてんだ、俺……。

「今日も申し分ないぜんざいであつたぞ」

「『駆走様で』ござる」

「美味かつたです、」おじさんは話でした。

俺はそのまま店を出ようとしたとき、店員さんと朱雀がなにやら話している。

財布でも忘れたのか？

「今日も御代はツケでよろしいですか?」

ん、今店員さんツケつて言つたよな？

「うむ！」

今日も。つていつつもツケで食つてるわけ？

「あ、今日は金があるのであつた！」

朱雀はひらめいたようにポンと手を叩き、一いちを振り向いた。

۲۰۸

「お客はん、今までのツケた分の請求書です、たのんます」

につくり微笑み、俺に一枚の紙を差し出す店員さん。

……ええええええつ？！

「ありがとうございます～またおこしやす～」

【甘味処 びちょぬれ庵】を後にした人力車一行。お気に入りのぜんざいを食つて、上機嫌の朱雀さん。お化けのくせに満腹満腹、といった表情のおっさん。

俺だけ大ダメージを喰らつたんですが……。

……もう一度と朱雀となんて来るもんか―――！（ううつ、ぐずん。

P.S・こいつは俺の誕生日だから。ってわけじゃなくて、
ただ自分がぜんざいを食いたかつたから、彦左衛門さんを呼んでまでここへ来たのだう。

このスペック女めええええ！－（うつ、うつ、うわああん！

22 ハルの誕生日（びちょぬれ登場）（後書き）

個人的にはせんざいよりあんみつ派です！

23・おわる祝典

びちよぬれ庵を後にした俺たち。

人力車は道行く人々からクスクス笑われながら、超低速で歴史のまちを走る。

夕暮れは刻々と迫っていた。

「朱雀殿、まもなく辻ですぞ」 彦左衛門さんが謎の発言、『辻』って何のことだ？

「うむ。もう集まっている頃であるひつ」 朱雀は額に手を当てて、遠くを見るポーズを取る。

ちょうど2本の道路が交差する十字路、つまりそれが『辻』だそ
うだ。

人力車が減速しだし、辻に近づいていることが俺にも分かった。
そして、俺の体から血の気が失せていくのも分かった。

さして交通量の多くない十字路。

そこにたくさんの人人が群がっているのが肉眼でも見えたのだ。

「おおっ やはりもう着いていたか！ 奴らハルの誕生日を祝い
に駆けつけて来たのだ」

朱雀が人力車の上で立ち上がり、集まった大勢の人々に手を大き
く振る。

俺は焦点が定まらず、呆然としたまま眼前のありえない光景に鳥

肌がわきあがつた。

ゾツ

「アーティストの絵、～！」

距離およそ50M、辻では俺たちに手を振りながら叫ぶ人々の姿。

二、セイ

「ニギヤホーみんなのサボタージュバーニング」
「サボタージュバーニング」

一斉に声を揃えて俺への祝いの言葉を叫ぶ彼ら。

その声はまるで地獄から響く怖ろしい・呪われた響きだ。

ボロボロの兜を被り、身につけた鎧はどこか欠けている。

華國時代の衣装を身に纏つた御上

骨と皮だけ、あるいはすでに血肉のみになつた姿……

幽霊の集団が俺を祝福してる！！

「アーニャ、お前がお母さんのお手本だねーー。」

俺は再び情けない叫び声を上げ、たぶん気絶した。

『たぶん』つてのはその後のことが記憶にないからだ。

体が少し浮遊感を感じる。

チン

と、エレベーターの音で俺は目を覚ました。

「気がついたか、ハル」

「おおっ、大丈夫かね？」ハル坊

どうやら朱雀と彦左衛門さんに抱えられ、俺は我が家に帰ってきたみたいだ。

「うう。やっと開放されたあ……！」

幾つもの恐怖体験を経て、すっかり夜になつちまつたがやっと戻ってきた！

やっぱ俺の安息の場所は我が家だ！

玄関のドアをガチャリと開けると、俺はその場に固まる。

……この某TV番組、5男4女大家族的な玄関はなんだ？

スニーカーにサンダル、ローファーに革靴、ブーツetc……

所狭しと靴が並べられ、俺の靴が置けないんだけど。

リビングからは楽しげな笑い声と、料理の良い匂い。そおーっとドアノブを回し、リビングに入る俺。

「「お帰りーー！」

料理を囮んで見覚えのある人物が勢揃い。

父、母、妹・秋奈、ダチ・謙吾とリョウ、加えてなぜか玄武、さらにはじんべえさん？

間違つた、権兵衛さん。

頭が真っ白になり、その場に立ち去へしていくと、後から朱雀の弾んだ声が聞こえた。

「ふふつ、ハルは幸せ者だな！」

……今まで生きていて、最高の誕生日になつました!!……ウレシイナアー……ぐずん。

23・おわる祝典（後書き）

みんなから「おめでとう」って言わると喜せだ～

24・ハル、デパートへ行く

人生最悪の誕生日を乗り切った（？）俺、櫻井 春彦。

今日はめんざくせえ6時間授業をサボつて、四越デパートへ向かっている。

PM1:00

四越デパート経由、バス車内。

「マジだつてえー、限定モデルだぜ？ 憧れのバッシュの限・定・モ・デ・ル！」

鼻息荒く、興奮気味の謙吾。

限定モデルのバッシュ欲しさに授業を平氣でサボる奴だ。

「俺、謙吾のそつゆう無駄にエネルギー発揮できるとこ、ソンケーしちゃうわ」

呆れた顔で、尚且つ棒読み発言を繰り出すのはリョウ。お前のそのシユールさを俺は尊敬するけど？

そう、お馴染みのメンツでサボつてます。

朱雀さんはいませんよ。

なにせあのスペツシ女、四越^{アリ}パートへ行くつて言つと、「あの地に踏み入つてはならぬ！」の、一点張り。

青龍がどうとか、領地がどうとか。

そんなわけで、具合が悪いから保健室でスリーピングしている、とペラこいたわけだ。

朱雀は必要以上に口クロク頷き、簡単に俺から離れてくれた。

どこのへ行くにもくつついて来る厄介な朱雀。

だが！

やつと俺は自由だア！！

PM1:30

四越^{アリ}パート前え～四越^{アリ}パート前え～お降りの方は停車してからお立ち下れい

バスのアナウンスに従つて、俺たちは^{アリ}パート前の停留所降りた。どどん、とびえ立つ立派な^{アリ}パート。

以前俺がたどり着けなかつた場所だ。

「ひやつほあ～　早いトコ展示場に行いつぜえ～売り切れぢやうよお～」

謙吾に先導され、俺とリョウはちんたら^{アリ}パート入り口へ向かつた。

人の多さはやっぱり東京とは違うな。

まちの中心地だけど、そこまで人であふれているわけじゃない。

中へ入ると、明るい照明に白い内装、1階の化粧品売り場から香る香水の匂い。

うつとりした顔で、一人フロアで佇んでいると、前を歩いていたはずの謙吾がいねえ……

あれ？

リョウもいねえ……

あれ……？俺、置いてけぼり？

24 ハル、デパートへ行く（後書き）

えー、このサイト様の公式ブログ・「小説家になろう？秘密基地」の、新イラストコーナーにイラストのつけてみました（笑）
どんべえさんです（笑）

25・ハル、迷子(?)になる

一人呆然とフロアに佇んでいると、ビシッヒースーツを着こなした、いかにも青年実業家といった風貌のお兄さんが俺の目の前にやって来た。

ワックスで軽く流した黒髪、整った綺麗な顔立ち、ダークグレーのスーツにライトブルーのYシャツ、ネクタイはグレーのストライプ。

どうみても20代半ばだな。

「お密様、どうかなさいましたか？」

につこり微笑む青年実業家。

あ、もしかして俺、迷子と思われているのだろうか？

「い、いえ……友達とはぐれただけです、から……」

取りあえず1階のフロアから離れよう！

迷子だと思われて声を掛けられるなんて、俺は小学生かよ。

しかし、俺の返事を聞いた青年実業家は、くわっと表情を変え、側にいた秘書らしき女性に大声をあげた。

彼は命令口調で秘書を指差し、先ほどの爽やかなイメージを思い

つきり崩してくれたのだ。

「緊急事態だつ！－ 至急インフォメーションに連絡し、迷子のアナウンスを流したまえつ－」

エッ？！

待て待て待て。

迷子のアナウンスつて？

それはちょっと待てええええ－！

俺は四越デパートで買い物を楽しむ客を気にせず、大声を張り上げた。

「大丈夫ですからあ！ マジで平氣ですかあつ！ ウグイス嬢の美声を迷子アナウンスで發揮させないでくださいつ－」

青年実業家のピシッと整ったスーツをわし掴みにして訴える。

「そつか……それは残念だ……」

青年実業家は冷静さを取り戻し、ぽつりと呟いた。
なんで残念そうな表情すんだよ？

「ボク、社長から手を離しなさい」

側にいた秘書が俺を睨みつけながら語尾を強めて言い放った。

「ってか、『ボク』って俺の事かよ。
ってか、この青年、社長？！」

俺が握つてしわになつたスーツを直すよつこ、下襟を何度も引っ張る社長。

再び爽やかな笑顔を俺に向けて一言。

「また何かあつたら、いつでも遠慮なさりす声を掛けて下さいね」

俺はその王子的オーラに萎縮して小さく頷いた。

初めて会うタイプだ……
爽やかすぎる……！

秘書と共にエレベーターに乗つて去つていく若社長の姿を見届け、俺は1階フロアで突つ立つたままだつた。

後ろの化粧品売り場から黄色い声がヒソヒソ聞こえてきた。

「きやあ～やつぱりステキですね、社長」

「あの迷いのない決断力、リーダーシップ、そしてあのイケメンっ
ふり」

「どう見ても王子ですよね～、カッコイイなあ、青龍社長」

女性従業員に大人気だな、オイ。

……つて。

あれ？

なんか聞いたことのある単語が……
青龍社長、って言ったよね？

あれ？

前にもどこかで『青龍』って聞いたよ……？

まあいいか。

それよりも謙吾とリョウがいるであろう、バッシュの展示場へ行こうかな。

P M 2 : 1 5

俺は一人エスカレーターに乗つて5階の展示会場へ向かった。

25 ハル、迷子(?)になる(後書き)

昔、デパートで迷子に…なりました。

親とはぐれ、自力で出口を見つけて生還しましたが。

迷子アナウンスを流された経験はありませんので！

26 デパートジャック

5階展示会場へ向かう途中、お知らせの案内がデパート内に放送される。

ピンポンパンポーン

館内でお買い物をお楽しみの皆さん、本日は当店へお越しください、誠にありがとうございます

ウグイス嬢のやんわりとした、綺麗な声が全フロアに響いている。誰一人この案内放送に注意して聞くはずがない。

俺は3階へ昇るエスカレーターでただぼんやりとそのアナウンスを聞き流していた。
アナウンスはさりに続く。

只今、5階特別展示場にて、限定品や名産品を集めた、スプリングバーゲンを……

そんな時だった。
事件が起こったのは。

キャアアアアアアッ

天井付近のスピーカーから、恐怖に満ちたウグイス嬢の叫び声が聞こえた！

なにい？！

悲鳴が聞こえ、すぐにマイクが切られた。館内は騒然となる。
これはもしや、事件ってやつじやねえか？
もしかして、デパートジャックってやつか？

3階で心臓をバクつかせながら、俺は頭をフルに回転させ、状況を必死に飲み込もうとした。

……だめだつ、全然頭が働かねえ。
……いつも頭、使ってないからかな……

そんな時、上の階から怒声が響いてきた。

「緊急配備だ！ 従業員の命が最優先だ、僕の指示に従つて行動したまえ！」

例の若社長、青龍さんがエスカレーターを駆け下りてくる。
どうやら想像以上に凶悪な事件のようだぞ。

1階のインフォメーションセンターへ走る青龍さんの後を二つや
りついて行く俺。
非日常的な出来事にちょっとワクワク。
尾行っぽく後をつける。

やべえ～ちよっと楽しい！（スマセン）

そんな事をしてると、インフォメーションセンターの真横にやって来た俺たち。

(いや、俺は社長達に見つからないように隠れてるんだけど)

受付カウンターから何者かの姿がチラツと見えた。

社長に付いてきた従業員達は恐怖で足がすくんだ状態らしい。

そんな時、一人立ち上がったのは

「僕の大切な従業員に乱暴は断じて許さんッ！ 己の暗愚あんぐさを恥じるがよい！！」

こめかみに青筋を浮かばせ、ハンパない剣幕で、ウグイス嬢を襲つたと思われる犯人にまくし立てる若社長。

姿の見えない犯人にビシッ！ つと指差し、腰に手を当てた、時代遅れのかなりダッセエポーズをとっている。

先ほどの爽やかなイメージは……？
王子の品格はどうへ……？

シン。と静まり返つた1階のインフォメーションセンター付近。まるで墓場の如く、不気味なまでの静寂だ。

と、受付カウンターからひょっこり顔を出す者がいた。

「ん、その声……青龍ではないか。何をしているのだ？」

スツトンキヨウな声で目を瞬かせている人物の顔は、毎日見てい
る。

朱雀じやねえかあああ！

27・青龍現る

1階インフォメーションセンターの側に置かれた、ドライバー風のオブジェの陰で身を潜めていた俺。

事件の始まりから今現在に至るまで、バッヂリ見てしまった。

デパートジャックの犯人は

朱雀じやーん……

静まり返ったフロアでは、受付カウンターからフツーに顔を出した朱雀を除いて、みんな目が点状態。

誰かがこの状況を開拓しなきゃ事が進まねえな。
はあ……俺がいくかあ……

やりきれない想いで、のろのろオブジェから顔を出す。
ため息を一つついたあと、受付カウンターで陣取る犯人に目線を走らせた。

「朱雀、なに、やつてるんだ……？」

声には落胆と共に、せつとやるせなさがこじみ出していたと思ひ。

朱雀は急にオブジエから出現した俺に驚いたのか、無言で目を何度も瞬かせる。

ポーズを力ヶ「良く（俺から見ればカッ「良くはないが）キメていた社長が、ゆっくり振り向く。

「ハルではないか、無事であつたようだな！」

朱雀が無邪気に笑いながら、悪びれもなく発言。

カウンターの陰になつて見えなかつたが、目を凝らすとそこには朱雀に鉄扇を突きつけられ、恐怖で身動きできないウグイス嬢の姿が あつた。

さつきの叫び声は、これかっ！

「くつ……（くそスペツツ女めつ）受付嬢から離れて説明してください、朱雀さん……！」

俺は朱雀さんが逆上しないよう、あらゆる葛藤に耐えて聞いて聞いた。奥歯がギリギリ音を立てているが、それも耐え忍んだ。

「何を言ひ、青龍がハルを連れ去つたのでわたしがわざわざ出向いたのだー。」この娘たちにはハルの監禁場所を尋ねただけだぞ？」

えええ 「の」「、話作つてゐる——！

俺が一人打ちひしがれ、魂を抜かれたようにその場に固まっていると、爽やか且つ冷静な声がフロアに響いたのだ。

「朱雀……君、何か勘違いしてるみたいだけど、『ハル』とやら、僕は知らないけど？」

腕を組み、首をかしげるのは四越『パート社長・青龍さん。その言葉に少しムツとした顔を見せた朱雀。

「そんな事はない！ ハルが学校から消え去り、気配を辿ってきたらそなたの領地にいたのだ。つまり、青龍が監禁したと同じ事！」

腰に手を当て、唇を尖らせて言い放つ朱雀に、再び青龍さんは目を点にしたまま固まる。

偉そうに胸を張つて、無理やりこじつけやがったよ、この口。朱雀、根本がおかしくね？

「あのおー……2人は知り合いなんスか？」

俺はカウンターに陣取る朱雀と、カウンターに向かい合つ社長を順に見つめた。

「知り合いではない、同属なだけだ」 朱雀が頬をふくらませ、否定する。

「ええ、知り合いですよ。同属ですから」 青龍さん、すっぱり肯定。

2人の意見がかみ合つてねえな。

「君が『ハル』？ 申し遅れました、僕はこの四越グループ社長の青龍です。『千年王城の青龍』と言つたほうが分かりますか？」

じきりの爽やかスマイルで名刺を手渡す青龍社長。

つか、でた……！ 謎の組織『千年王城』。
もうつっこむのはよそう。

俺はどんよりした気持ちで名刺を受け取った

28・朱雀VS青龍社長（前書き）

あけましておめでとうございます！

今年もよろしくお願ひします【ペコ

よりによつて28は長いので、読む場合は換行を入れて（入れなくてよいのですが）どうれ。

「すげえ……青龍さんてホントに社長なんだ」

俺は渡された名刺をまじまじ見つめながら呟く。

正直、朱雀の知り合いには口クな奴がいねえ。

チンピラもどきとか、しゃべるキツネとか、落ち武者 - sとか。

「ボク、社長を侮辱する発言、聞き捨てならないわね」

性格のキツそうな社長秘書が、俺に見えない圧力をかけてくる。いや、この物言いからして性格キツいのは間違いない。

こわつ！

でも青龍さん、従業員から信頼されてるんだなあー。

世の中にはワンマン社長が溢れかえってるってのに。

「まあまあ、僕は気にはしませんから。それよりも朱雀、四神には不可侵といつも暗黙があるのを忘れてはいませんよね？」

青龍さんはいつも通りの爽やかな笑みで朱雀に問う。

けれどその表情からは、ピリピリした何かが空気を伝ってきた。

朱雀はカウンターをヒョイ、と軽く飛び越え青龍さんの前に歩み寄る。

向かい合った2人が互いに睨み合い、その場は一瞬にして緊張が走った。

なんか……空気がやけに冷たくねえか？

「忘れてはおらぬ。だが今日そなたの領地に踏み入ったのは、ハルを迎えて来ただけ。

それで納得がゆかぬと言つならば、かかるて来るがよい」

先に仕掛けたのは朱雀だつた。

今までに見たことのない、挑発的で、不敵な笑みを口元に浮かべた朱雀。

前にも感じたことがある。

背筋がゾツとするような、朱雀に対する怖れ。

その時、初めて俺は『朱雀』が何者なのか疑問に思つたのだ。

「ふつ。ははは……！ 相変わらずですね、朱雀は」

張り詰めた空氣の中、突然明るい笑い声が響く。

少年のような顔で笑う青龍さん。

まるで旧友だけに見せる偽りのない笑み。俺にはそんな風に映つた。

え、マジで？

「ひつひつ展開？」

「ふ、あははははー、そつゆつ青龍も変わつておらぬな！ 特に間抜けな顔！ あはは、じょつじふつ」

いつものムカつく笑顔に戻った朱雀。

いやいや、青龍さんはそんな顔してないだろうが。
むしろお前の方が間抜けだと思うが？（むせ込むあたりが）

一気に和んだインフォメーションセンター前。

俺は騒ぎを起こした張本人（本人自覚無し）を連れて、四越デパートを去ることにした。

謙吾とつゝうの事はもうどうでもいいや、俺がいなくともバッシュは貰えるだろ。

青龍さんにこれ以上の迷惑はかけられねえしな。
いや、迷惑かけるのは俺じゃなくて朱雀だけだぞー。

「ハルくん、またいつでもお越し下さいね」

青龍社長は最初に会った時と同じ、爽やかな笑顔で俺に手を差し出す。

握手を交わして出口の回転ドアに向かおうとしたとき、思い出したように青龍さんが駆け寄ってきたのだ。

「これどうだ？」

なぜか差し出された茶封筒を受け取り、別れ際青龍さんと従業員の皆さんに手を振る。

ひつして、俺（と朱雀）は四越デパートをあとにした。
自由の身は超一瞬で散ったんですが。

帰りのバスの中で、先ほど貰つた封筒を開けると、そこに入っていたのは、『四越デパート特別商品券』 1万円分。

社長、太っ腹だ――――――！

しかし、朱雀がいるわけだしもう四越デパートには行けないではないか。

つか――使い道ねえじやん。

そんな時、商品券をじつと見つめる朱雀が暴露した。

「ハル、四越百貨店の地下1階にある『和処 もつたり』のみたらし団子は絶品なのだ。その商品券があれば……むふふ」

……

あれだけ四越デパートには行くなと言つておきながら、自分はみたらし食いに行つてるわけ？

そのむふふって笑いムカつくんですが。

「ふふつ、心配は要らぬ、ハルが青龍のところへ行く時はわたしも付いて行つてやるからな」

テンションが上がる朱雀に対し、俺のテンションは奈落の底へ落ちていく。

一度と浮上できない気がするよ。

「……どうせかな……」

俺、
一体何してこりまできたんだか……（ぐすつ！）

デパートジャック事件（？）の翌朝。

そんな事件があつても、義務教育中の学生は学校には行かなければ。

仕方なしにリビングへ足を運ぶ俺。

「おはよう、春彦」挨拶と同時に親父、出勤。

「おはよ、はるちゃん」……ちよ、はるちゃん、はやめてくれ。
「お兄ちゃん今日もひつどい寝癖えーキヤハハ」秋奈、あとで
覚えてやがれ……！

「お早う、ハル。む、元気がないようだが？」
いや、朱雀さん絡みですよ。

昨日の疲れは半端ねえ、今日もサボりたい勢いだ。

まあ、そんな事を朱雀が許すはずもなく。

なにせ、学校へ行かなければ大好きな給食が食べれないのだから。

そんなこんなで身支度を済ませた俺は、予定通り秋奈にチョークスリーパーをかまし、ほどなくして玄関へ向かつた。泣きながらリビングに駆け込む愚かな妹は放つて置いて。

「行つてくるわ……」

「では奥方、行つて参ります！」

俺のどんよりした挨拶に続いて、朱雀がウキウキしながら母に挨

拶。

ああ、給食を食べに行くだけの朱雀が羨ましいわ。

俺のクラス、3・5は朝夕間わずテンションが高い。教師達にとっては面倒なクラスではあるが、俺にとっては賑やかで楽しいクラスなわけだ。

そんな中、まるで呪われて死を目前にしたような最悪にテンションの低い男がいた。

窓際中ほどの自分の席へ着くと、右隣に座るマブダチの謙吾の異変に気付き、声をかける。

「おす、どした謙吾?」

俺より低いテンション ってか、人生が終ったようなオーラが出てるけど?

『ずーん』って効果音では表しきれないほど重いわ、こりゃ。

「バッシュを買って、四越から出た後すぐに自動車(ワゴン車)にぶつかって、荷物を全部道路にばら撒いちまって、限定モデルのバッシュがたまたま通ったクレーン車に潰されたんだって」

適切な説明サンキュー、リョウ。

俺の席、まん前に座るマブダチのリョウは事の真相を包み隠さず語ってくれたのだ。机に突っ伏したまま身じろぎもしない謙吾に、俺とリョウは呆れが混じった悲哀の眼差しを向けた。

「ペ、ペちゃん……！」

ぼそりと呟く謙吾。

哀れな。

つーか、車にひかれたって……なぜ学校に来てるんだ?
いるべき場所は病院だろ？ 普通は。

「謙吾殿も給食が食べたかったのだ」

俺の心を読んだよつて、哀愁漂う表情で朱雀が言葉を挟んだ。
いや、朱雀じゃあるまじ。

「今は干からびてるからそつとしここへやれりやせ」

リョウがポン。と俺の肩に手をかけて謙吾の席から離れる。

あまりにも不憫な謙吾はまあ、ほつといて。

俺は今日一日の平和を祈る。

朱雀はとつと教室を出て行き、毎になるまで学校の中を自由行動。

はあ、たるい。

不意に、前に座っていたリョウはくるりと振り返り、いつになく瞳を輝かせ、切り出した。

その瞳は、好奇心にキラキラ煌めぐ。

「な、ハル知つてる？ 湖にサメが出たんだってよー。市役所とか水族館の人たちが捕まえようとしたらしいんだけど、どつかの川に逃げたんだって」

湖にサメ？！ 川に逃げた？！ てか、サメは海だろ？！

「……物騒だな、ま、俺には」

俺には関係ないことだけど。と言おうとした矢先、リョウが言葉を遮ぎる。

「放課後俺たちで見に行こうぜーー！」

いつもはクールなリョウ。

しかし、ただのクールボーイではないと、今分かつたぜ。平凡な日常は退屈でシマラナイ。非日常的な出来事やスリリングが奴の闘志に火をつけるらしい。

「まじでか

「当然」

俺のすじぐ、すじーく嫌そうにした顔を氣にも留めず、リョウは首を大きく縦に振ったのだ。

29 · Cool or Hot? (後書き)

人は見かけでは判断できない熱いものを持っていると、黒鶴は思います！ たぶん：

放課後、干からびた謙吾をほつたらかしにして、俺とリョウと朱雀は武城中学校付近の小川に来ていた。

深さ10センチ、幅1メートルの小川でこだまする魂の叫び。
サメを追い求め、こんな小川で全ての力を如何なく發揮している
のは、クラス一のクールな男、リョウ。

浅すぎる小川をバツシャバツシャと突き進む。

ああ、こんなアホな事に全エネルギーを注げるリミットを尊敬する
なあ、俺。

そんなリョウを遠い目で見つめる俺は、間違なく冷たいである小川には入らず、あぜ道につつ立つて眺めるだけ。朱雀はというと、草履を脱ぎ、一人楽しそうに春の小川を満喫中。カエルに心ときめかせているようだ。なんて幸せな奴……。

二十一
一
二
三
四

間違つてもこの極細、極浅の小川には現れねえから！！

カアー、カアー

なんてカラスが鳴きだす夕暮れ。
空が茜色だあ～。すっかり茜色だあ～……。

「リヨウには……いねえみてーだ……」

肩を落としてぼそりと呟くリヨウ。

つて、えええ。今気付いた?
気付くの、オセエー……。

俺がもう帰るわ。と、催促するべく口を開いたとき、
俺、ちょっと隣町まで行つてくれるわー！

リヨウが再び目を輝かせて口走る。
理由は聞かないでおこづ。むしろ、聞かなくても分かる。
俺つてエスパー。

じゃあと言わんばかりに片手を上げ、夕暮れの小川から風のよ
うに去つていくリヨウ。

俺はお前の熱い部分を知れて、嬉しいよ。うん、まじでー！

「む？ リヨウ殿はどこへ行ったのだ？」

散々遊んで泥まみれになつた朱雀が、首をかしげてリヨウの後姿
を見つめる。

「夢を追い求めて旅に出たんだよ」

俺もリョウの後姿を遠い田で見つめた。

そんな時。

「だ、助けてください……」

突如苦しげな、むしろ死にそうな、咽の奥から振り絞ったような声がどこからともなく。

俺と朱雀は同時に、助けを求める声が聞こえた、小川へと田をやつた。

深さ10センチ、幅1メートルの小川で田にしたもののは

リョウが必死に捜し求めた、サメだ。
サメだ？！

うつづれあお？！

30 サメ捕獲大作戦（後書き）

全然大作戦ではありませんでした（笑）
だけど、サブタイはこれでいこうと決意しておりました（笑）

31・サメ現る

小川から突如聞こえてきた藁にもすがるような声。

「そそ、セイの殿方……だずげでぐだぞい……」

目の前にサメがいる。そのサメ、しゃべってるんですが。たくさん疑問点はあるが、以前にも似たような経験があるし……まあ置いておくわ。

俺は冷静にこの現状を分析し、“まあ置いておく”といつ合理的結果を導き出した！

俺ってばマジで物分りいいよね。
むしろ、天才？

小川で悶え苦しむよつこ、サメはビックチビックと体全体を動かしている。

そりやそうだ。

水深10センチじゃあ干からびるのも時間の問題だろつな。

俺が見るからにサメはある有名な人食いザメの一種ではねえ。明らかに小っちええ！

サケくらいのでかさで、見た目はなんつつか……

・・・キモチワルイ。

深海に住んでそうなギョロッとした目、ぬめり氣のある皮膚。

・・・やつぱキモチワルイ。おえつ・・・

触れるには物凄く抵抗感のある生き物が俺に助けを求めていりいやしかし、人として見捨てるワケにはいかねえ。

「だけど・・・だけど、やつぱ無理つー！」

「頑張れ～ハル～」

他人事のように、暢氣のんきに座りながら泥まみれスペツツ女が野次を飛ばしてくる。

こんのやろう。

「ど、うが・・・お助け・・・ぐだ・・ぞ・・・」

その擦れた声を最後に、小川に静寂が訪れる。

最後の力を振り絞つてサメはとうとう息絶えた。

ラッキー

そんな時、心の中で小躍りする俺に水を差す一言が。

「残念だつたな、ハル。この者まだ息があるぞ」

いつの間にかサメの側に座り込んだ朱雀。

全く動かないサメの体に手を当てて、わざわざ生存を確認してくれました。

しそうぱい顔で、唇をぐつと噛みしめる俺を見て、朱雀がむふふ、と笑った（ようく見えた）。

そんなこんなで仕方なしに、死にかけのサメを学校へ運ぶことになつたのだ。

32・美女現る（前書き）

ホントは31と32は同じ話だったのですが、かなり長くなるので2つに分けてしました。

短く感じると思いますが、どう承くださいませ。

32・美女現る

ひつそり静まり返った理科室で俺は石鹼を泡立て、必死に手を洗う。そりやもつ、指がふやけて白くなるへりついでだ。

そんな俺をよそに朱雀は家庭科室から持ってきた（盗んだきた）食塩を、水を張った実験用のシンクにドバッとばら撒く。

「サメ子よ、生き返ってわたしに恩返しをするのだー！」

朱雀は勝手に付けたサメの名前を呼びながら、目を輝かせてシンクを眺めてくる。

・・・ああ、日本昔話の『鶴の恩返し』的なノリか。

その時、白田を剥いて微動だにしなかったサメが、突然カツ！　つと田を見開き、派手に水しぶきをあげて、俺たちの前に姿を現した。

ザバアッ

シンクから出でてきたのは、やつせのキモチワルイサメ・・・

ではなく、

美しい女性だ。

は？

女性・・・？

キモチワルイのはじこへ？ 」の美女はどうから出てきた？！

マ、マジ？！ マジで鶴の恩返し的ノリ、キタ――――――！

数々の修羅場をぐぐり抜け、幾多の困難を越えてきた俺でもこの状況は予想外だ！

驚きと、滅多にお田にかかれないとくらいの美女を田の前にして、図らずも俺、テンションが上がつております・・・・！

水しぶきが床に落ちる中、田は泳ぎっぱなし。

朱雀は待つてましたと言わんばかりにほくそ笑む。

美女はシンクの水が静けさを取り戻した時、閉じていた田をゆつくりと開く。

海のような、真っ青な田。

瞳は深海のように吸い込まれそうな藍。

その姿は天女のようで、全身に降りかかる水しぶきを弾いてる様は神秘的。

天女のファッショソには全く乱れが感じられない。あんだけ派手に飛び出してきたのに・・・

俺は、あまりの唐突な出来事に言葉を失ってしまった。
(朱雀は期待の目で息を呑んでるだけだけど)

そんな静まり返った理科室に、場違いな声が響く・・・

32・美女現る（後書き）

～セミもました（笑

33. N現る（前書き）

33は過去最高に長い、1600文字です。
忙しい時に読まないよう注意ください。

理科室に全く釣り合わない、場違いな笑い声が響いた。
「ヒヤハハ！ よお、ハルヒコ！ ・・・と、チツ。朱雀もいたのかよ」

廊下から理科室を覗き込む形で身を乗り出し、粗野な笑い声をたてた後、思いつきり舌打ちをする人物。

朱雀の変人仲間、『千年王城の玄武』だ。

つか、この神妙な空氣読めよ！
最初の『ヒヤハハ』つて笑い、いらねえーから。
もしかして、玄武つてKY（空氣が読めない奴）か・・・？

玄武は俺と朱雀を順に見たあと、中央に置かれたシンクに美女が立つているのを目を丸くして見つめた。

美女はまだぼんやりした表情でシンクに突っ立つたまま動かない。
「ああ～？ 竜宮の美姫と名高い『N』じゃねえかよ」
驚きと疑問に満ちた声で玄武が言つ。

ほう、と短く咳き、朱雀は目を大きく見開いた。
「噂に聞いていたがこの者が深海の姫か」
納得！ と言わんばかりに、手のひらにポンと拳を乗せるポーズを取り、朱雀はうんうん頷く。

俺だけわかんねえーんだけど？

そんな時、美女がやつと自分の世界から抜け出したのか、ハツと気付いたように辺りを見回した。

彼女は玄武、朱雀・・・と順に見回し、ふと俺に視線を止めた。それもガン見。

え？ なんで俺？！

突如、シンクに立っていた美女はそこから一瞬で飛び出し、床に着地するのと同時に勢いよく土下座をした。

「ゴソッ！！

額を床にこれでもかと密着させながら、鈴をころがすような綺麗な声で俺に語りかけてきた。

「殿方がわたくしを死の淵から救つてくださったのですね？ なんとお礼申し上げればよろしいのでしょうか？！ ああ、殿方がいらっしゃらなかつたら、わたくしは・・・わたくしはっ」

途中から興奮してきたのか、最後は感極まって泣き出した美女。着物の裾で涙と鼻水を拭う音が聞こえる。

・・・なんだこの美女は。 サメから変身しちゃうくらいだから、たぶん朱雀絡みだろ？。

「ハルヒコ、こいつは海を統べる海神の一人娘、竜宮のお姫様なんだぜ」

玄武は理科室の窓に肩肘をついて、楽しそうに説明する。

「まじでか。もう俺、そういう話は慣れましたよ。なんぼでも来いや。」

「わたしも噂で、竜宮にそれはそれは美しい姫君がいると聞いたのだ」

土下座したまま動かない美女の髪飾りをつつきながら、朱雀が楽しそうに付け加える。

「…そういうイタズラやめなさい。」

「わたくし、名を『ル』と申します。殿方のお名前はなんと申しますか？」

美女もとい、ルさんが「口を床に付けたままなので、俺は何とか顔を上げるように促してみるも、頑としてその低姿勢を崩そつてしまい。」

「…俺は櫻井 春彦って言つんスけど…あの、ルさんそろ顔上げて…」

俺が言いかけた時。

突然ガバッと上半身を上げるルさん。

びっくりするからー 心臓に悪いからー

その唐突な行動が俺の心臓にダメージ与えるんですけどー！

「ハルヒコ様ですね？ わたくし、お礼致します！ 命を救つていただいた身。是非ともわたくしの城へ来てくださいませ！」

藍色の瞳がキラキラ輝いている。

顔をほんの少し紅潮させ、声が弾んでいるのが初対面の俺にも分か
つた。

こんな綺麗な女のヒトにお願いされちゃ、断れねえよ！

「ギャハハ！なんか知んねえが、良かつたじゃねえかハルヒロ。
乙姫に気に入られるとは大したガキだぜ！」

玄武が一人笑い出す。

「・・・なぜハルだけなのだ・・・わたしだって助けたのに・・・
！」

朱雀は自分にお礼の言葉がなかつたのが気に食わないようで、ふく
れつ面でブツブツ文句を言いつ。

・・・朱雀、お前はほぼ何にもしないだろうが。シンクに塩をぶ
ちまけただけだろ？

訴えかけるように、期待の眼差しで見つめる乙姫。

俺はじつと見つめられ、照れながらその場の流で頷いてしまった。

「じゅ、お言葉に甘えて・・・」

33・乙現る（後書き）

お疲れ様でした、しかしあまだ続きます（笑）

34・鶴の……ではなく、鮫の恩返し

俺は乙さんに先導され、また学校近くの小川にやつて来た。
なぜ小川？

俺たちの後には玄武と、いかにも不機嫌な朱雀が立っている。

・・・わかつたって、乙さんからお礼貢つたら分けてやるから。

すっかり陽が沈んでしまい、辺りは暗くなっている。
そんな中、小川を見下ろす乙さんに、最大の疑問をぶつけてみることにした。

「あの、乙さん。どうでこの小川で死にかけてたんですか？」
俺は乙さんの顔を覗き込むように尋ねる。

それを聞いた乙さんが眉間にしわを寄せて、切ない表情を浮かべた。

やべえ、俺なんかマズイこと言つちやつたかな・・・？！

乙さんは切実に語る。

「聞いてくださいませ、ハルヒコ様。昨日の事です。わたくしは退屈しのぎに龍宮から散歩に出かけました・・・」
唇を歪め、さらに続ける。

「冬の間、特にすることもなく退屈で退屈で仕方ありませんでした。」

そしてやつと春が巡り、久々に海ではしゃぐダイバー やサーファーを襲おうと、回遊ポイントに瞬間移動を試みました

・・・

俺の耳が悪くなつたのか？

俺の耳が正常であれば、人間を襲つて聞こえましたが・・・いやいや、ちよつ、待てえええ！！ 人を襲つんですか？！

つてか、瞬間移動？ できんのオ？！

俺は体を硬直させ、額から流れる冷や汗もそのままに、眉間にしわを寄せて彼女を見つめる。

こんな美女からこんな言葉、聞きたくなかったな～・・・

「ところが、冬の間瞬間移動術を使つていなかつたせいか、とんだ失敗をし、湖に出でしまつたのです！ そして人間共がわたくしを見てキモチワルイだの、フカヒレに加工してしまおつだの言い張るのです」

さめざめ泣き出した乙さん。

確かに彼らの気持ちも分からぬでもない。

むしろ、サメバージョンでいるからそんなことになるんだと思つが。今の美女バージョンで湖に出ていたら彼らの対応も違つたと思うが。

「わたくし、命ながらこの小川まで瞬間移動してまいました。しかし、どんどん力が抜けてゆき、助けを求めていたしだいで」

「

います「

着物の袖で、鼻水をビーンとかむ乙さん。

「ギャハハ！ 川にいたのがハルヒコで良かつたじゃねえか、乙姫！ 僕様だつたら助けずフカヒレに加工してたぜえ！」
「わたしだつて、わたしだつて助けたのだつ・・・！」

玄武がからかうようにチャチを入れてくる。

朱雀はまだブチブチ文句をほざく。

「ハルヒコ様、これから竜宮へ繋がる浜辺まで移動いたします。そこから竜宮へ向かい、おもてなし致しますわー！」

乙さんが目を細めて微笑み、俺の手をギュッと握る。
乙さんはどの角度から見ても美女オーラが出ている。こんな美女が
もてなしてくれるんだつたら、どこへでもついて行きますーー！

・・・でも、浦島太郎の物語が頭に浮かんでくるのは気のせいか・・・
・？

竜宮城へ行つた浦島は、地上に戻つたとき、じいさんになつたつて・
・・絵本で読んだけど。

目の前の小川が急に怖ろしく見えてきやがつた。

もし絵本どおりの展開だつたら、俺ヨボヨボじいさんじゃね？

「面白そだから、俺らは入り口の浜辺に先回りしてるぜえ」

玄武が楽しそうな顔で、まず無理な事を言つてのけた。

「このまちに浜辺が無いって分かってんのか？」

「ちょっと行って来るわ！」の距離、じゃねえぞ？　海はそこ。

「玄武様、わかりました。では後ほどお会いいたしましょう」

乙さんは玄武と朱雀に向かって丁寧にお辞儀をすると、俺の腕をガシッと掴み、深さ一〇センチの小川にダイブした。

35・地獄へのいざない

普通ならバシャっと水しぶきを軽くたて、小川の砂利の上に立つはずだ。

だが、浅いはずの小川に飛び込んだ俺の体はまるでブラックホールに吸い込まれるような感覚に陥った。それは絶叫マシンのあの心臓を持つていかれそうな感覚と等しい。

ここって小川だろ？！

ありえねえ――――！

数秒間感じた浮遊感はいつの間にかなくなっていて、気がつけば足が地面に着いてる。

俺は固く瞑った目をそっと開けてみた。

目の前には、絶対ありえない光景。

海が広がっている・・・！

「ハルヒコ、いつまでここにくつづいてんだよー。」

玄武が俺の目の前に立っているじゃねえか。

おまけに朱雀もふくれっ面で立っている。

なになに？

そんなにポピュラーなモノなんですか？ 瞬間移動術つて。

瞬間移動を初体験した俺は、ビビッて乙さんとガツシリしがみついたままになっていた。

醜態だ・・・（ぐすん。

「さあ、ハルヒコ様、わたくしの城へ参りましよう」

乙さんが夜の海ヘザバザバ入つて行く。

はた
傍から見ればめつた入水自殺だわ。

「ハルヒ」「ファイオッ！」 超いい加減な見送りだな、玄武。

「仕方ない・・・今回だけはハルに譲るつ！」 朱雀・・・そんな悔しそうな顔で言わんでも。

俺は若干の不安と共に、手を引かれながら乙さんと一緒に海へ入つていいく。

この時期は海水の温度がめちゃくちゃ低つ！ 夜だからなおさら低つ！

最初は膝まで浸かっていたが、腰、胸、しまいには首まで海に浸かつた状態になつた。

ホントに大丈夫か？！

浦島太郎みたく海の中でも呼吸できる・・・んだよな？

「さあ、城は深海にあります。一氣に行きませぬ~」

乙さんも首まで海に浸かった状態で、こじやかに俺へ説明する。
ん?

なんかいっつ・・・水の中でも息ができるすごい術とか、無いの?
え?

俺、このまま深海まで行くの?
ちょっと、待・・・!!

ドボンッ!

手を引かれて俺は暗い暗い海へ引きずりこまれた。
まるで悪霊に地獄へ引きずり込まれるかの如く。
ガボガボと、必死の形相でもがく、俺。

その後自分がどうなったかは分からぬ。

おかげ様で、そこから記憶がブツツリ途切れてしまった・・・

35・地獄へのいざない（後書き）

35に全く関係ありませんが、秘密基地のイラストコーナーに青龍社長のイメージ画を貼つてみました（笑）
あくまで黒鶴のイメージなので、スルーしても構いません。

36・終幕の教訓【人を見て法を説け】

俺が目を覚ました時、水平線から美しい朝日が昇るのを見た。

あれ・・・？

竜宮城か、ここ？

「大丈夫か？ ハル」

俺を覗き込むようにして声を掛けたのは朱雀。
どいつもこには竜宮城じゃあないらしい。

ぼんやり霞んだ目をこすって、上半身を起こす俺。
見渡すとそこは竜宮城の入り口と呼ばれた浜辺だった。

「朱雀・・・乙さんは？」

「乙姫ならば深海の城へ帰つて行つたぞ」 朱雀はつまらなそうに
ポツリと答えた。

「もてなしは無理みてえだから、今度お礼の品を贈るつてよ～」
玄武が眠たそうにあくびをしながら答えた。

あれからどうなったんだ？

朱雀にあの後の出来事を尋ねてみる。

「海の中でもがいて失神したそうだ。乙姫が言つていたぞ！」 な
ぜか嬉しそうに話す朱雀。

お礼の竜宮城招待がチャラになつて、ざまあみや。とても言いたい
のかこいつは？

朱雀の言い草に力チソんときたが、平静を装つて続きを問う。
「つて事は、朱雀と玄武が土左衛門になりかけた俺を助けてくれた
のか？」

「そんなわけあるまい。浜に座つて海面に浮かび上がったハルを見
ながら笑っていたのだ」

「俺も俺も。プカ～つて浮いてきたのはマジウケたぜえ～！ よく
生きてたな～ ギヤハハ！」

穏やかな朝に、笑い声が重なり合つて響く。

・・・どうやら、俺は半土左衛門状態で、波に押されて浜辺に打ち
上げられたようだ・・・

ブチツ！

そんな中、血管が凄まじく弾け切れる音が俺の頭蓋骨に響いた。

「てつ、てめえら・・・！ 俺が死にかけてるつて時に助けもしね
えで笑つてたのかあ――――！」

ガバッと立ち上がり、まだ腹を抱えて笑う2人に詰め寄った俺。

本気でキレたね。

過去に得た、朱雀取り扱いの教訓さえ忘却の彼方。
感情に任せて目いっぱい声を張り上げてしまった。

その時、鈍い金属音が俺の鼓膜を刺激する。

ガチャツ
ジャラツ

俺はそれ以上の暴言を吐けなくなってしまった。
額に浮かぶ脂汗。
体中から吹き出る冷汗。

朱雀は鉄扇を俺の首筋に突き付け、声を封じる。
玄武は拳銃を俺の胸に押し当てる。動きを封じる。

「……じめんなさい、うそです、ブラックジロークです……」

両腕を上げて、か細い声で謝るしか俺にはできなかつた……

ニンマリ笑みを浮かべる朱雀と、鼻で笑う玄武。

無抵抗の俺に2人は満足したのか、それぞれの武器を懷こし込んで帰る準備を始めた。

その場にへにゃへにゃと崩れ落ちる俺。

俺、サメを助けて良い事したはずなのに、2回も殺されかけるなんて・・・

もう誰も助けてやんねえ・・・（うひうぐ、ぐずん。

かくしてサメ騒動は無事、最悪のエンドティングで幕を閉じたのであつた。

36・終幕の教訓【人を見て法を説け】（後書き）

人を見て法を説け：相手をよく見極めて、その相手に適したやり方でモノを言え。という例え。

（ことわざ辞典 シリーズ13より）

サメ捕獲大作戦、終幕です。

黒鰐は泳げないので海が怖いです。あそこは地獄の入り口だつ！

37・『ドン・ハ郎』死す！

恐怖体験をしたあとの出来事。

- * 全然復活する気配の無い、干からびてリラックス状態の謙吾。
- * 謙吾のために、毎日朱雀の隠し撮りブロマイドをプレゼントする俺。

* プレゼント3日目には完全復活。

* サメを探しに隣町へ行ったはずのショウは、なぜか日本海まで行つちゃったそうだ。

* この町に戻ってきた時、「クジラを見た」と満足げに語る。

* 当初の目的から完全に逸脱しているが、あえて触れないでおく。

こんな感じで、ようやく落ち着いた俺の日常。

ある日の日曜日。

俺は朱雀のいないリビングで、ソファーに寝転びのんびりくつろいでいる。

「さやははは～」
「ふあはははは～。」

秋奈の部屋から大爆笑が聞こえるが、さすがに慣れたぜ。フツ。

俺はニヤリと笑みを浮かべながら、変わらずソファーで寝転ぶ。

「つむ。やはりわたしほ」の二上がねつじょコマコモを隠していると思つのだ

「あたしは、マリリンだと思つてた。そつ言われたる二上が怪しかもおー」

・・・

「いやあー！ 死んじゃせだあー！ ドン・ハ郎おおお～

「おのれえ、いろ助めえ！」

・・・

いやつ、やつぱまつときのウソです。

秋奈と朱雀の会話が気になります。

また出てきた『ねつぢょリマリモ』がどうしても気になるつ・・・！
えつ、ドン・ハ郎死んじやうの？ いろ助が犯人？

俺はすでにのんびりどこかではなくなつており、ソファーに座り直して両手で頭を抱えた。

俺の頭が変なのか、それともアホ秋奈とスペツツ女の頭が変なのか？

俺が一人苦悩していた時、

ピンポーン

誰かが訪問してきたようだ。

マンション友達の奥様方と買い物に出かけた母に代わって、俺が玄関に行くこと。

「フクミン、急便でーす、ハン口お願いしまーす」

俺の家に届いたのはかなりでかめの荷物。しかもクール便。縦38センチ、横53センチ、高さ45センチの中型テレビが入るくらいのサイズ。

伝票を見ると、送つて来た人物の名が・・・

『深海灘1丁目238番地 竜宮 』

なんじやこの『テラメな住所は——？！
『』って、あの時のサメ美女か？！

俺は心の中で絶叫しつつ、冷静にダンボールのテープを破り、箱を開けた。

その瞬間、俺の背後に稻妻が走る。ドーン、みたいな。

そこには冷凍保存された数々の魚介類（主に深海魚系）。

・ これつて、竜宮城の魚達が犠牲になつたつてことだろつか・

乙さんがこのダンボールに生贅を入れるとこりを想像してしまい、

俺の背筋に冷や汗が流れた。

おつかねえ・・・！

ダンボールを台所にそっと置き、後はこのグロテスクな魚が詰まつた箱は母に任せることにした。

俺はひたすら晩飯にこの魚が出てこないことを祈るーー！

秋奈と朱雀のアホみたいな笑い声を聞きながら、俺は堅く目を閉じたのであつた・・・

37・『ドン・ハ郎』死す！（後書き）

サブタイ、37の内容とほぼ関係しておりません（笑）
悪氣はあつませんのでお許しください！

38・お残しは許しまへんでー！

どんなに肉体的に疲れていても、どんなに精神的に疲れ果てても、朝はやつてくる。

その疲れが癒えてなくとも、俺は学校へ向かわなければならないのだ！

・・・ああ、義務教育つてめんどい・・・

そんな気だるい態度で乗り切った午前中の授業。唯一の救いは楽しい給食時間だ！

・・・にんじんが食材の中に入つて入れば、楽しさ半減だけどな。

他のクラスより1・5倍はテンションの高い3・5。その中でもやけに五月蠅い奴が、謙吾。

「ちょ、知ってる？ 四越の側にあるメイドカフェに可愛い口入つたんだぜ！」

ニヤけて話す謙吾に、リョウが冷めた口調でツッコミを入れた。

「謙吾、お前さあ、スザクちゃんの前でそれ言つていの？」

・・・確かに。浮氣（？）は良くないことだぜ、謙吾。

「ぱっ、バッカやろ！　俺はスザクちゃん一筋に決まつてんだろ！」

席から勢いよく立ち上がり、謙吾は顔を赤らめながら、朱雀の顔をチラチラ盗み見る。

そんな告白に近いことを言われた当の本人は・・・
本日の給食である「ソフト麺 醬油味」を美味そうにすすっていた。

ナチュラルに無視した――――――！
シカト

謙吾は涙目で朱雀を見つめながら、小刻みに震えた後、体中の骨が無くなつたかのように机に崩れ落ちた。

「うつ、ヒックつ・・・！　ソ、ソフト麺めえ・・・！」

泣きながら麺にハツ当たりする謙吾に、本気で同情するよ・・・

朱雀とリョウはおかわりをすべく、すでに席を立つていた。

謙吾はまだ泣きながら、2人の後に続く。

俺は一人、まつたく「シの無い麺をすすりながら、窓の外をぼんやりと眺めていた。

「・・・このつ！ また群がりやがって、あっちいけ！ クソガラス共！」

声は窓の下に広がる花壇から響いている。

窓から顔を出し、下を覗いてみるとそこには誰かが落としたコッペパンに群がるカラス。

と、それを必死の形相で追い払う用務員のおっちゃんがいた。

ガアー、ガアー！

おっちゃんの簫と闘うカラス軍団。
しかし、人間様に敵うはずはねえ。

ものの1分足らずでカラス軍団は方々へ飛んでしまった。
用務員のおっちゃんは蜂の巣状態のコッペパンをゴミ袋に入れると、
どこかへ歩いて行つた。

そこへ、1羽のカラスが再び花壇へ降り立ち、必死にパンの欠片を探している。

「カラスも大変だよな・・・」

心にもないことを、ポツリと呴いてみた。

俺はソフト麺のスープに浮かぶ、にんじん（細切り）をポイ。つと窓から落とした。

花壇をうろついていたカラスは、空から落ちてきたにんじんを見つけ、急いで嘴へ放り込む。そして、窓から顔を出す俺をじっと見つめたのだ。

俺もカラスに対抗して、ジロッと睨み返す。

そんな顔しても無駄だぜ？

スープにもうにんじん入つてねえし、それにお前に食いモンやる義理はねえし。

そう、単に俺、にんじん嫌いなんだよね。

フツと口元に笑みを作り、俺は空っぽになつた食器を見て、満足げに頷く。

・・・俺はにんじんを攻略したぜ！

38・お残しは許しまへんやー！（後編）

「お残しは許しまへんやー！…」は、方言であります。
かの有名な、忍者のたまご達が繰り広げる忍者ギャグ漫画に出で
る、食堂を取り仕切るあのおばちゃんのセリフ。
確かに、食べ物を残しちゃいけないですな。

39 「萌え」って何だ？

本日の授業はつつがなく終了いたしました。

あとは、無事家にたどり着ければ、平和な一田を過ごしたことになる！

そつ・・・無事たどり着ければ。

「んじゃあ予定通り、メイドカフェに行くぜーーー！」

給食時間に半べそをかけてた謙吾が、高らかに拳を突き上げ、テンション高めに叫び声をあげた。

謙吾の掛け声に、リョウと朱雀が続く。

「ねえしゃあーー」熱いね、リョウ。

「ああああああー！」朱雀・・・その場のノリで適当に叫ぶな。

有無を言わせず、朱雀は俺の首根っこを掴み、半強制的に四越デパ

ート経由のバスに押し込む。

俺に不参加という選択肢は無かつたらしい・・・

道中バスの中で俺以外の3人は、他の乗客への嫌がらせの『じとく』、大音声で会話をする。

かなりテンションが上がってるな、こりゃ。

「女中喫茶店……ああ、どのよつた店なのであらう? むふふふ」
目を輝かせてなにやら想像しているらしい朱雀。その笑い方、かなり変質者チックですが。

「俺らは『ご』主人様って呼ばれるけど、スザクちゃんは『お嬢様』って呼ばれるんだよお」

後部座席で朱雀の隣をゲットした謙吾が、話し掛けながら『じとく』ばかりに密着する。

「やつぱー、メイドさんって他の人種とは違つと思つんだ! なんかこいつ・・・オーラ? そんな感じのがさ・・・!」
リョウの興味が何か違うところにある気がするけど・・・まあ、いつか。

俺は3人のノリについて行けず、他の乗客にこいつらの関係者と思われないように、無言で窓の景色だけを見つめていた。

まあ、実際のところ俺もメイドカフェには興味があるさ!—
だけど行くとなると心の準備つてもんがあるだろ。
なのに・・・これは強制連行つてやつだと思います。

ふふふ、おかげでドキドキ感、一切無しだぜ!—!

そんなこんなで四越前の停留所でバスを降りた俺たち一行。バス通りから一本はずれた小路に、そのメイドカフェは佇んでいた。

見た目は小洒落た喫茶店、といつかメイドカフェと言わなければ、ごく普通の喫茶店に見える。

白を基調としたキレイな外観。オープンテラス付だ。

謙吾が慣れた手つきで店のドアを開ける。

カラランカララン。と、扉に取り付けられた金属製のドアチャイムが鳴つた。

「お帰りなさいませ、『主人様、お嬢様』

舌つ足らずのような、甘い声が耳を通じて脳に響く。胸に『まろん』と書かれたプレートを付けた、メイド服の女性が俺たちを迎えた。

謙吾とリョウは完全に頬を緩ませながら、まろんちゃんの案内で奥の席へ向かう。

朱雀は入り口の前で、うつとりしながら何度も「お嬢様・・・」と、繰り返す。

どうやらそう呼ばれて余程気分が良いらしい、恍惚けいこつとしながらその場から動かないのだ。

そんな朱雀を尻目に、俺は戦場へ向かうかの如く、意を決したように心中で呟いた・・・

親父・・・母さん・・・俺、萌えの世界に行ってまいります！

39 「萌え」って何だ？（後書き）

かなり何度も練り直したりしているので、更新に時間がかかることがあります…。う

40・美少女メイドと元んじん、やの心は？

ふと我に返り、前の2人を追いかげよつと一歩踏み出したその時。先程のメイド・まろんチャンとは別のメイドさんが、慌てて俺の前に駆け寄ってきた。

「お、お帰りなさいませー『主人様』

わいわいなくマニコアルに沿つた接客をする『メイドちゃん』。

語尾に絶対ハートマークが付いてる気がするな・・・

いやいや、それよりもきっと『『が謙虚の言つてこた『可愛いく』だろ』。

店内にいる他のメイドさんたちも可愛いけど、群を抜いているのが、この『だ』。

年も俺たちに近いようだ。むしろ年下に見えるなあ・・・（それってバイト馱目じやね？）

ゆつたりカールした黒髪は、光にあたると深緑に近い光沢を放つ。長いまつげと丸くて大きな目、美肌にツヤぷるの唇。

レースをあしらつた白いカチューシャに、白と黒でオーディネートされたフリフリのメイド服。ベルト付の黒パンプスに純白のオーバーニーソックス。シンプルな制服ではあるが、これが彼女たち自身

をついに立てる。」（謙吾談）

そんな黒髪のメイドさんは心を奪われていた時、田の前の彼女は俺を見て驚いたように、大きな田をさらに見開いた。

「なになに？ 見つめられるとすぐ照れるんだですが……」

「あなたは、あの時の方ですね？！」

黒髪のメイドさんはキラキラと田を輝かせ、俺の手を両手で握り締めてきた。

手がつ、手があ！（照

いや、それよりも『あの時』って……？
俺はこの口に会つたことなんてないけど？

「えっと、どうかで会つたつけ？ 俺君の名前知らないナゾ……」

心臓が高鳴りつつも、冷静に言葉を返し、彼女の胸元にある名前のプレートに田線を向けた。

『鳥丸』と漢字で書かれた可愛らしいプレート。

なんだか、名前が……あんま可愛くないんですけど……

「ハイ　武城中の敷地で会いましたあ、あたし、八咫富鳥丸ヤタノミヤノカラスマルって言います。長いんで『カラスマル鳥丸』って呼んで下さい」

語尾にハートマークをつけながら、鳥丸ちゃんが俺の手をさらに強く握り、キュートに微笑んだ。

現代じゃありえねえ名前を名乗ったが、彼女の名前なのだから、仕方ないのですよ。

うんうん。

「よひしぐ、俺は春彦ヒナヒコって言つんだ」

彼女につられる様に、俺も微笑みながら・・いや、デレデレしながら自己紹介をする。

そんな俺を見て、鳥丸ちゃんは更に表情を明るくした。

これが萌えの力なのか・・?

いや、ちょい待ち。

俺は学校でこの口にあつた記憶はねえ。

こんな飛びきり可愛い子を見かけたら忘れるはずねえしな。

「覚えてませんかあ？　あたしはあの時の事、忘れてません・・・。だって、ハルくんがあたしを助けてくれた王子様だもん・・・さやあ～」

鳥丸ちゃんが頬を赤く染め、両手で顔を覆いながら続ける。

「お腹が減つて死にそうだった時、優しい王子様がにんじんをくれ

た事、忘れるわけないわ！　とゆうわけで・・・ハルくん、あたしのご主人様になつて下さい――！」

『とゆうわけ』ってなに――？！
つてか、色んな意味でなにいいい？！

41・カラス再び

恥ずかしさと驚きが同時に俺を襲う！

王子様つて・・・にんじんつて・・・「主人様つて・・・？」

「俺、君を助けた覚えないし、にんじんはカラスにやつた記憶しかねえんだけど・・・」

あまり良くない頭をフル回転し、彼女の記憶を探してみるも、やつぱり思い当たらねえ。

俺の言葉を聞くや否や、鳥丸ちゃんが興奮気味に一步前へ出た。

「ハイ にんじん貰いましたあ～ やつぱり、覚えてくれてたんですね～！ だつてあの時あたしとハルくん、目が合つてたもの」

・・・まさかっ！

・・・ああ、何となく嫌な予感はしてたけど、受け入れたくはなかつたぜ・・・

あの時花壇に1羽だけ戻ってきたカラスが・・・この萌え美少女・

・だそうです。

そんなの、そんなの間違ってるう――つ・・・！

真実を知らない方が、幸せだつて、何かで読んだ気がする。

俺はガックリ肩を落として力なくうなだれた。

「たしかに、目が合つたな」俺はカラスに睨まれた気がしたから、睨み返しただけだがな。

「やっぱり、ハルくんはあたしの『主人様になる運命のヒトなんだわ……』

黒真珠のような目を潤ませて、俺の困惑した顔を食い入るように見つめる鳥丸ちゃん。

彼女の正体を知ってしまった以上、素直に受け入れるわけにはいかねえ！

言葉に詰り、俺の額からは滝のように汗が流れ落ちる。

俺を情熱的に見つめる黒髪のメイドさん。

お互に田の前に立つて居るので、温度差を感じるんですが。

そんな沈黙を破ったのは、今まで店の入り口で突つ立つていた朱雀。

「ハ咫富鳥丸^{ヤタノミヤノカラスマル}、ハルをそなたの主にしてやることはできぬぞ。今はわたしの元に居るからな」

やつと自分の世界から抜け出してきたのか、先程のうつとつした表情は消えていた。

鳥丸ちゃんをフルネームで呼ぶ朱雀。

やつぱりいつものパターンで2人は知り合いのようだ。

鳥丸ちゃんがその声に反応し、俺の陰になつて見えないのか、頭をひょこっと出すようにその声の主を確認した。

その時、彼女は喉の奥に詰つたような、短く低い驚きの声を発したのだ。

「あつ・・・！」

次の瞬間、俺の体を押しのけ、腕組みをしながら立っている朱雀の前に駆け寄った。

片膝をつき、左の拳を床につける、いかにも主に仕える従者が取るようなポーズでひれ伏す鳥丸ちゃん・・・

俺はただただ、呆然とその現代に似つかわしくない光景を見つめていた。

「お、お久しぶりでござります！ 朱雀様！！」

顔を紅潮させ、目に薄つすら涙を浮かべる彼女。

先程の乙女チックな口調は一体どこへ？

なにこの江戸っ子みたいな、落語家みたいな口調は？

萌えはどこへ―――？！

4.1 カラス再び（後書き）

このメイドカフェ編では萌えにあまり触れていませんが、ご了承くださいませ。

42・素晴らしい日本の「」事情（前編）

42は最後になつておつまむ。
「」で乗つ切つてくださいこまむ。

メイドカフェの店内入り口付近にて、スパッツを履いた少女にひれ伏す一人のメイドさん。

なんだ、この画は？

「ハル、この者はわたしの眷属けんぞくなのだ。もう会っていたとは知らないかつたぞ？」

鳥丸ちゃんに目線向けた後、朱雀は小首を傾げて俺に尋ねる。

「眷属……？ 相変わらず言つてること理解できねえな……。ついか、知らないのも無理ねえよ。丁度朱雀が給食のおかわりに夢中だった時だもんよ。

「ちょっとね……」

俺が話を濁そうとしたとき、間髪入れず、鳥丸ちゃんが謎の【やんす】語で切り出したのだ。

「やうなんでやんす！ あちき、最近めつきり社やしきに供物があがらず、仕方なくこのバイトを始めやした。しかし、まだ給金も入らぬ状態。・・空腹に耐えかねて残飯を漁つてやした・・そんな時、このお優しい坊ちゃんが食べ物を惠んでくれたのでやんす！」

世の中のメイドさん愛好家の方々が、この光景を見たら泣き出すよ？ 美少女のメイドさんが『あちき』って・・・

萌えが最高に似合つ「が『やんす』って……

「やうか、苦労していたのだな。だが、ハルはそなたにやれぬぞ」
朱雀は氣の毒そうに、鳥丸ちゃんの肩にそっと手を置いた。

俺は朱雀の言い回しが妙に氣になり、固唾を呑んで続きをの言葉を待つた。

「もううんじゃあこやす！　この坊ちゃんが朱雀様の従者であった
とは露知らず・・・鳥丸をお許し下さい！」
深々と頭を下げ、切実な声で詫び入る鳥丸ちゃん。

「うむ。しばしわたしの元に、置いておかねばならぬからな」
そして氣にする様子もなく、にっこり頷く朱雀。

従者・・・

俺、こうこうポジションだつたワケ？

鳥丸ちゃんがゆっくりと顔を上げ、朱雀の金の目をじっと見つめた。

「朱雀様、あちきは陰ながら見守りさせていただきやんす。」

俺を抜きに意味深な会話を交わす2人。

俺の口は半開きになつたまま元に戻らず、理解不能の会話だけが耳を通過していく。

遠く彼方から（距離にして約20メートル程だが）甘ったるい声と、
やけにでかい歓声が店内に響いた。

「それでは、まろんの愛情でわいわいおこしかけます」

「イエーイ」

「ああ、すんげえ楽しそうだな、謙吾とリョウウ……」

俺だけ全然楽しくないのはなぜだらうか？

これはもう、萌えの世界から脱出して、家に帰るべきだと俺は考
える。

肩からずり落ちた鞄を掛け直して、一直線にドアへ向かった。

さひば、萌え。

ドアノブに手を掛けたその時、可愛らしい声が待つたをかける。

「待つてください・・・じゃない、待つてハルくん！　あたし、お
礼を言いたかったの・・・ホントにありがとう！　あたしの王子様
じゃなかつたけど、これは運命の出合ことだと思つの・・・！　だか
ら、だから・・・」

元の口調に戻つた鳥丸ちゃんは両手の指を組み合わせて、胸の前に
置くと、上田遣いで訴える表情を見せた。

彼女の可愛らしさに、世の男たちは間違になく悩殺されるだらう。

彼女の正体を知っている筈の俺さえも、心が僅かに揺れる。

彼女の続きを言葉に息を呑む。

「だから・・・また食べ物、恵んでねーー！」

切実な叫びだつた。

それもそのはず、近頃はゴミの処理も厳しいものだ。

残飯を探すのも一苦労だろうな。

「・・・うん・・・」

俺は引きつった笑みを浮かべて一言返し、そのまま鳥丸ちゃんに手を振つて、足早にメイドカフェを後にした。

「行つてらつしゃいませ、ご主人様」 鳥丸ちゃんのマニコアルに沿つた、ぎこちない声だけがいつまでも耳に残る・・・

まだ明るい空を見つめて俺は黙々と小路を歩く。

俺の後を追つてきたであろう朱雀が横に並び、声を弾ませて話しかけてきた。

「女中喫茶店とはなかなか面白い所なのだなー、ハル、また行こうではないか」

・・・もう行かねエーよー！　俺だけ全然面白くなかったんだけどー！

かくして、俺の萌え初体験は一瞬で終了した・・・（ぐずん。

43・ハル、平和を勝ち取る

祝日

AM11：00

今日の俺は気分最高です！

なぜかというと、今我が家にスパツツを履いた悪魔がいないからなのです！

毎日毎日、ストーキングまがいのように後をついて来る朱雀。折角の休日も奴がいると、平日と比べて疲れが3割り増しなのだ。

そんなわけで、妹・秋奈に以前四越デパート社長、青龍さんから貰った商品券を渡し、好きなものでも買ってこいやーと、優しい兄を演じてみたわけだ。

当然上機嫌で券を搔っ攫い、デパートの開店時間に合わせて母と朱雀を（無理やり）引き連れ家を出たのだ。

もちろん、朱雀が秋奈に連れて行かれることは計算済み！なぜか朱雀の波長と合う秋奈は、仔犬のように懐いているからな。

俺には理解できないが。

こうして俺はつかの間の平和を手に入れたのであるー！

リビングのソファーに寝転がり、大きく伸びをする俺。

ああ、久々に一人きりを満喫できそうだ……！

静かなリビング。

テレビの音声も、走り回る足音も、遠慮を知らない大音声のおしゃべりも、今は無い。

今この家に俺以外の人間はいないのだから。

「なんじゃ、お前さん一人か？」

が、ソファーの後から老熟した言い回しの、どこかで聞いた声が急に聞こえた。

口から心臓が飛び出るんじゃねえか、って程ビビる俺。
不意打ちは厳しいつてば……

勢い良く上半身を起こし、声の主を確認するも、目線の先には誰もない。

俺は座つたまま、部屋をぐるりと見渡した。

おかしい、誰もいねえ……

だけど、さつきの声は前に聞いたことがあったような、無いような……

一人ソファーの上で顎に手をあて、首を捻つて考えてみるもせつぱりだ。

「いつやあー 無視するでないぞ、ハル少年ー。」

再び聞こえた声は、俺の名前を言に当たった。

声の出所はやはりすぐ近くのようで、俺は立ち上がり、部屋全体を見渡したあと、ソファーの後に田線を落とした。

声の主を確認した俺の顔は、おそれりへ虫を踏み潰したそれだろ。

田線の先には杖をつき、一本足で直立するキツネの姿があった。

出てきたよーまた来りやつたよー・・・ビンズさん、じゃない権
兵衛さん。

俺のつかの間の平和は、1時間30分であえなく終了・・・である。
・・(べすご)。

43 ハル、平和を勝ち取る（後書き）

また来ました、どんべえさん。

44・相手の名前は正確に。（前書き）

ちょっと真面目臭い話になつてゐるかも……いないかも。（オイツ

44・相手の名前は正確に。

「ふむふむ、遠慮は要らん。長椅子に掛けて結構じゃよ、ハル少年

偉やうに片方の前足を出し、俺にソファーに腰掛けるよう促す
権兵衛さん。

俺の家なんですか……！

勝手に他人の家へ侵入してきた、薄汚れたキツネ。

俺は当たり前の疑問をぶつけてみた。

「あの～、何しに来たんスか？」

偉やうな態度のキツネに、俺は一応低姿勢でモノを尋ねる。
おそれく、おそらくだが、俺の方が年下であろう。

「決まつてあるじゅるりー、朱雀殿と茶でもと思つて云説の茶葉を
持つてきたんじや、お前さんに用なざあるかこー！」

礼儀を弁え低姿勢で発言したにもかかわらず、権兵衛さんは俺を一
喝した後、くびくビ説教をたれやがる。

え、理不気じやね……？

どうやら朱雀とお茶を飲むためにやつて來たが、その朱雀がいない

！ と、憤慨。

遠いところ折角来たのだから、

「お茶を飲んでから帰る」と、風呂敷から茶葉とお茶セットを取り出し、湯飲みに注いだ熱いお茶を俺の目の前に出す、權兵衛さん。

ふふふ、ジ・エンド・オブ・俺の自由。

前回置いていったお土産のせいで、權兵衛さんをあまり好きになれないでいる、俺。

何を話そつ・・・

沈黙が訪れ、茶を啜^{すす}る音だけが広いリビングに響いた。

「わしゃてつきり朱雀殿が、ヒトを忌んでおつたのかと思ったがの・・・」

突然權兵衛さんはため息に似た、穏やかな声を俺に向かた。

『ヒトを忌んでいた』？

どういう意味だろう？

そういうえば、俺は朱雀の事をあまり知らない。

俺と会う前は一体何をしてた？ 本当に人間じゃないとしたら、一体何者だ？

もしかしたら、朱雀が居ない今、それを聞き出すチャンスかもしれねえ！

権兵衛・・・じゃない、どんべえさん・・・「んべえ・・・あれ?
? どっちだっけ?

まあいいか、どんべえさんなら俺の知らない謎を知っているかもし
れない。

なにせ朱雀のみ友達なのだからー。

出されたお茶を啜った後じっくり間をとり、遠回しのセリフは抜き
にして、核心から入ることにした。ちやつちやと聞いて、せつねと
帰つてもらおう!

「あの〜どんべえさん、朱雀は本当に人間じゃないんスか? (も
はや人間の域を超てるけど)」

テーブルに湯飲みを置き、食い入るように皿の前の(薄汚れた)キ
ツネを見つめる俺。
どんべえさんの少しつり上がり氣味の目が、僅かに笑みをたたえた
ように感じた。

45・自由は果てしなく遠く

俺の間に、田を縋めながら答えるじんべえさん。

「それはお前さんの捕らえ方次第じゃ、ヒトなる者と見るか、ヒトなりわる者と見るかは己が決めればよこのだ」

じんべえさんの答えは、俺の望むものではなかつた・・・いや、キツネに聞く自体が間違いだつたのだ・・・

俺は無駄骨だつたこと、聞くんじゃなかつた。とガッククリ肩を落とす。

「まつたく、朱雀の周りの連中はなんでこんなのはつかなんだ。つかなんで俺に絡んで来るんだよ・・・」

テーブルに突つ伏して、うわ言のよひに呟く俺。

その時、不意に声を殺したような笑い声が聞こえてきた。

「ぐ、ぐくつ」

伏せていた顔を上げ、田の前のじんべえさんをチラリと上田使いで見てやつた。

「ぐぐ、ふあふあふあー。」

現代では使わないであらう、微妙な笑い声を上げるじんべえさん。

俺はギョシとして、背筋をピンと張りながら、反射的に体を起した。

「ハル少年、確かに皆お前を元に興味を持つておるがな・・・。」
つ教えておいてやうつ。皆が集まるのは、朱雀殿が二ングンである
お前さんと一緒に居るから、じゃよ

何も知らない俺に、たつた一つのヒントを『』えて、満足そうに頷く
どんべえさん。

キツネと人間じや、やつぱり解り合えない俺は思つよ。
種族の壁は越えられないものだ。

なんか、重要な事を言つたのかもしけねえが、やつぱりだ!!
やつぱり解んねえよ!!

目が点の俺にどんべえさんはどつこいしよ。と重い腰を擡げて立ち
上がる。

「邪魔したのう、ハル少年。朱雀殿によろしく伝えといってくれんか
の」

そう言うと例の如く、どこに置いてあつたのか杖を取り出し、それ
に付いていた一枚の葉っぱを額に当てた。

「いざれ解るわい

ニヤリと笑みをこぼした後、ボンッ！ と、ふざけた煙に捲かれて
どんべえさんは姿を消した。

朱雀の正体を探るつもりが、更に謎を増やされ、呆然と俺の前にだけ残っている湯飲みを見つめた。

玄関から賑やかな声が僅かに聞き取れた。後数秒足らずで櫻井家の女性陣が買い物から戻つて来るだろ？

・・・まあ、いずれ解ることだって言われだし、今は深く考えないよつこじてひよ。

俺は数秒しか残されていない自由を満喫すべく、勢い良くソファーの上にダイブする。

が、ソファーにたどり着かないうちに、バカでかい笑い声と、大量

の荷物が津波のようにリビングへ押し寄せてきた・・・

秒殺かよ・・・（ううつ、ぐすつ。

46・クリスティーナを捕獲せよ

キーンゴーン
カーンゴーン

月曜日の朝、俺は今日もけだるい授業を受けに学校へやつて来た。もちろん朱雀も登校。

クラスの皆はこの謎のスペツシ女をフツーに受け入れてる。大した疑問じやないらしい。

「おす、謙吾にリョウ」

「お早う、謙吾殿リョウ殿」

「おはよお～スザクちや～ん」謙吾は急いで駆け寄り、朱雀の手を握つてアピール。俺におはようはねえのか？

「よつ」片手を小さく上げて、俺と朱雀に挨拶するリョウ。いやマジクールだねえ。

朝の賑わいもチャイムと共に終わり、担任の小山先生が教室に入ってきた。

一通りのH.R.を終えて、「じゃあ今日も張り切つていこう」と、小山先生がシメる。

先生が教壇を離れると、早々に教室から出て行く朱雀を横目で確認。皆席を立ち、授業が始まるまで再びおしゃべりを始めていた。

俺たちも例外ではない。

「ちよ、聞いて聞いて。昨日駄菓子屋のおっちゃんに爆竹もらつち
やつてさうためしに使ってみたけど楽しいんだよおー、ハルとリョ
ウも遊ばね？」

「お前中3にもなつて・・・」

「あはは、俺は賛成ー」

そんな時、小山先生がおもむろに俺たちの席までやって来たのだ。

「おい、謙吾・リョウ・春彦ちょっとといいか？」

珍しく名指しされ、俺たち3人は顔を見合せた。

「なんスか、やまと山下

リョウが一言返す。

つてか、『山下』つてなんだよ？

小山先生、もとい山下は俺たちを見下ろしながら、話を切り出した。

「お前ら放課後暇だろ？ ちょっと頼みがあるんだが・・・」

めっちゃストレートですね。ま、確かに暇人ですがね。

「実は、1週間前に俺の家の裏手にある林で、子猫がつりついてい
てな。たぶん親とはぐれてしまつたんだらう、腹をすかせて鳴いて
いたんだ。」

山下は悲しそうな顔で語りだす。

「不憫に思つたおれは、子猫を家で飼つことにしたんだ。それはもう懐いて懐いて、可愛いつたら・・・」

体育教師の山下が乙女のよくな表情でうつとつしながり話す姿は・・・微妙つ・・・

「ところが！ 昨日の夜・・・突如響いた爆竹の音に驚いたクリスティーナ（子猫の名前）は窓から飛び出し、竹林の方へ逃げていつてしまつたんだ・・・！」

・・・爆竹・・・

俺はそろ一つと謙吾の方に顔を向ける。リョウも同じく謙吾に田線を向けていた。

「・・・あ・・・そういうえば、山下ん家つて【ハゲ竹林】たけばやしの近くでしたつ・・・け？」

おもいつきり、しまつた！ という顔をしながら謙吾は恐る恐る言葉を挟んだ。

謙吾も、通称【ハゲ竹林】と呼ばれる、広大な竹林を裏手に構える町に住んでいるのだ。

「さうだが？ まあ、そんな事があつてな、お前達どうせ放課後暇だらうから、クリスティーナを探し出して欲しいんだ！ おれも仕事が片付いたら向かうから」

俺とリョウがジロリと謙吾を睨み、当の謙吾は顔に変な汗を滲ませて、話を黙つて聞いていた。

100%謙吾の責任だろ。

「分かりました、俺らでクリスティーナを探しますん」「フリーズしてしまった謙吾に代わって、リョウが代弁する。

こうして、俺たち3人によるクリスティーナ捕獲作戦が始動した。

・・・今度はネコかよ！

46 クリスティーナを捕獲せよ（後書き）(あき)

今回から始まる話で全登場人物が揃います。
でもつて、揃い終えたらラストに向かいます……！

47・ハゲ竹へGO!

昼のチャイムが校内に響き渡る。給食を食べながら、俺と謙吾とリョウがおまけとして朱雀が作戦会議を開いていた。

「でも、ハゲ竹林（略してハゲ竹）つたつて、かなりでかいし簡単には見つかんねえと思うな」

顎に手を置き、リョウは難しい顔をした。

その言葉に、朱雀がピクリと眉を動かす。

「竹林・・・あの西の林に何をしに行くのだ？」

この表情、少し機嫌が悪いのだと、俺だけが感じ取った。

「ちょっとね、山下の飼い猫が逃げちゃってさあー俺たちが仕方なく探しに行くわけ」

さも自分は悪くない。みたいな言い草だな、謙吾！

「『やまでい』・・・？」小首をかしげる朱雀。

朱雀には『ティー』が聞き取れないらしい。お前はおじいちゃんかよ？

「そゆうこと。朱雀は関係ないから、ついて来なくていいんだぜ？」俺がからかうように、意地悪く言つた時、思いもしない返事が返ってきた。

「ハル！ 西の林へは行つてはならぬ！ あそこは白虎が有する領

地、あの地にだけは行つてはならぬ！！」

給食の食器をひっくり返す勢いで、朱雀がバンッ！と机に手を付けて猛然と立ち上がる。

朱雀の大声で、テンションの高い3・5も一気に静まり返った。こんなに声を荒げる朱雀を見るのは、俺も初めてのこと。

俺の目線に合わせて朱雀が落ち着きを取り戻した口調で続ける。

「白虎は玄武や青龍と違つて、甘くはない。あやつは『」に書する者であれば、ためらいなく打ち捨てるのだ」

俺は朱雀の迫力に押され、黙つて頷く。

謙吾とリョウはその緊迫さがさほど云わつていらないらしく、給食のおかわりに席を立つていた。

ちよつとは話聞こうぜ・・・

そんな熱を帶びた給食時間が終わり、5時間目の授業もほどなく終つた。

生徒は皆騒ぎながら玄関へ向かっていく。

放課後の捕獲作戦は始動した！

朱雀にハゲ林へ行くのを止められている俺たちは、朱雀に内緒で山へ行くことにした。

「朱雀、俺たち山下にイット・イズ・コール、だから先に家に帰つててくれないか？」

朱雀の肩にポン。と手を置き、諭すように語りかける俺。

英語は『テタラメだが、必殺技には違ひねえ。

「『やまてい』に・・・いと、い、えず』ーる？ うむ・・・ならば仕方あるまいな」

口をもじもじさせて、最後は頷く朱雀。

勝つた・・・！

朱雀がおとなしく学校を出て行くのを確認した後、俺たちは急いでハゲ竹へ向かった。

48・竹林に潜む の恐怖（前書き）

(注) 48の終盤に『お下呪』な表記が「やれこます！」
「まあ、いんないやひしこじ葉を使つなんて」と思つてしまつた
方。
くれぐれも田舎者よへ、『注意あれこーーー』『注意あれこーーー』

48・竹林に潜む　　の恐怖

武城中からハゲ竹へは、歩いて40分ほどかかる。その40分の間に様々な作戦が練られたが、どれもくだらない内容ばかりだ。

その一

ハゲ竹から山一の家まで、またたびを点々と撒く【またたびにつられて家に戻る作戦】

その二

子猫の母親のフリ（キグルミ着用）をしておびき寄せる【クリステイーナマミー作戦】

その三

ひたすらクニヒイさんのマネをして「ルールルル」と呼ぶ【北の国からクニエイ作戦】

e t c . . .

全部却下!!!

特にその三はキツネ呼ぶ時の掛け声だろ!

うだうだ3人で思いつく作戦を考えていた時、俺はふと朱雀の言葉を思い出した。

『西は白虎の領地・・・』

朱雀の話し振りからすれば、白虎はどうやら謎の組織『千年王城』

のメンバーだろ？。

しかも、朱雀があれだけ念を押すほど的人物だ。
おそらく組織最強的存在だな。うん。

朱雀や玄武がかなりの危険人物なのは分かる。

その朱雀が注意を払う奴なんだから、相当危ない奴なんだろう。

俺は作戦そっちのけで、まだ見ぬ『白虎』の想像図を頭の中に描きながら歩いていた。

きつとマッヂョ。

たぶんスキンヘッヂ。

おそらく武器は槍か斧。

間違いなく強暴だと思う。

かなり怖い想像図が出来上がり、俺は一人身震いした。

そんなこんなで40分が経過し、目的のハゲ竹に俺たちはたどり着いた。

とりあえず、作戦はねえ！

各自分かれてクリスティーナを見つけるべしー！

こんないい加減なミッションが今、スタートしたのである。

「おーいクリスティーナあー、カニカマやるからでー」「
たいしてやる気の無い声で、一応ネコを探す俺。

俺と謙吾とリョウはそれぞれ手分けしてクリスティーナを探すことにしてたのだ。

そんな時、穏やかな林に怖ろしい叫び声が響き渡る！

「 め ゃ あ ああああああああー おっ、おうっ、俺のっ、俺の ハア タ
一 ピ ランス + 1 - (N I K E - s P L U S) が あああああ
ー！」

声の主は謙吾。

その直後、ピタリと声が止んだ。

これらを踏まえて推測すると、謙吾は氣を失ったのだらう。

と、まあ深刻に語つてみたがこの叫び声はおそらく、お氣に入りのNIKE-sのスニーカーでムークっと踏んでしまったための哀れな断末魔（死んじやいねーだらうけど）。

・・・山や林にやよく落ちてるからな・・・ウン がさ・・・

一人戦線離脱したため、俺とリョウは2人でクリスティーナを探すはめになつたのである。

48 · 竹林に潜む の恐怖（後書き）

…え？ 注意書きするほどでもない…？

49 「ル」の連呼を侮るながれ（前書き）

これからシリーズ（？）な展開に突入…っぽです。

49 「ル」の連呼を毎るなれ

ああ、もう帰りてえな・・・

俺がそんな事を思つていたそのとき。
目の前に子猫がちょこんと座つているじゃねえか。

なに？ このアッサリ感は？

「二やあ」

可愛らしい一聲をあげた子猫、いや、クリスティーナはつぶらな瞳
で俺をじっと見つめている。

落ち着け春彦！ ここで逃がすわけにはいかない！ ピリする？
ガバッといくか？！

いや、ここは慎重にいくべきだ！！

心の中で血問血答を繰り返し、俺はゆっくり屈み、クリスティーナ
の前に手を差し出し優しく声を掛けた。

「ルールルル、ルールルル」

恥もアホらしさも忘れ、俺は【北の国からクニエイ作戦】を決行して
いたのだ。

その不思議な音色に導かれるように、クリスティーナは俺の手元に

歩み寄り、その身を委ねた。

クリスティーナ、GETだぜー

子猫の小さな体を抱き上げ、小躍りしながらハゲ林を出よいつと踵を返した。

その時、

竹林特有の静けさを破る、甲高い笛の音が聞こえてきた。
俺の背後に何者かの気配を感じる。

バツと振り向くと、

そこには奇妙な少年がぽつんと立っている。

どうからどう見ても小学5、6年生。

真っ白な髪に白い肌、平安時代風の白衣へんてこな服で、たしか・・
・水干とかいう服装だ。

その目は朱雀と同じ、金の目。

だが、朱雀とは違い、怖ろしい獣のよう感じむ・・・

驚きと同時に緊張が押し寄せる。

俺はクリスティーナを小脇に抱えながら、今までにない圧迫感を覚えた。

少年は無表情且つ、感情がこもっていない声で、俺に話しかけてくる。

「お手前じょせが小生こうせいの眷属けんぞく、八葦杜守ヤシヨシノモリノカミを攫つかつた者か？」

・・・は？

朱雀以上に会話が理解できねえ。

俺は首をかしげて少年にやんわり質問返しをしてみた。

「ボク、名前は？ どうから来たんだ？ お母さんと一緒にやないのか？」

「命が惜しくば小生の間に答えよ」

小馬鹿にするように尋ねた質問。

少年は表情一つ変えずに、厳しく問いただした。

生意気なガキめ・・・！

態度を一変させ、俺はいつも通りの声で少年に言葉を返す。

「なんとかの力ちからなんて、俺は知らねえよ！ 掠うとか人聞き悪いこと言うもんじゃねえぜ」

腕を組みながら語尾荒く説教をたれ、少年を睨む。

すると少年は少しつり上がった目を大きく見開き、すぐ元に戻すと冷ややかな口調で告げた。

「ならば、今すぐお手前が連れている小生が眷属を開放し、この地から出てゆくがよい」

少年は竹笛を片手に持ち、俺に指差すようにその手を振り下ろす。それはまるで真剣を向けられたような、気味の悪い感覚。

俺の背中に一筋の冷たい汗が流れれる。

49・「ル」の連呼を毎るなかれ（後書き）
（あくし）

あつ、気付けば1万5千アクセス……！

ああ、目と鼻から涙が出そつ……！

皆さまあいがとうござりますつ。後もう少しただけお付き合へ下さい

！

50・ハル、キレる

【ハゲ竹林】に緊張が走る。

そんな時、緊迫感をぶち壊す声が、俺と少年の近くで聞こえてきた。

「ハルー、ネコいたかあー？」

細い竹をかき分けて姿を現したのは、リョウであった。突然出てきたリョウに驚いたのか、少年は俺から田線を外し、声の主をジロリと睨みつけた。

リョウも奇天烈な衣装を身に纏つている少年を不思議に思い、俺に尋ねてきた。

「なんだ、このヘンテコなガキは？」

ズビシッ。と少年を指差し俺に説明を求めるリョウ。

ああっ、この険悪な雰囲気の中、この発言はやばいんじゃねえか？

案の定、少年は無表情さに磨きをかけたように冷ややかな表情で一言。

「つづけめ

手に持っていた竹笛を唇にそっとあて、甲高い笛の音を林に響かせた。

その音色は静寂を破るような、脳に突き刺さるような、嫌な響き。俺は一体それが何を意味するのか分からず、小首をかしげた。

ドタッ

不意に俺の背後で何かが倒れる音がする。

振り向くと、そこにはうつ伏せで動かないリョウの姿があった。

「リョウ?ー」

慌てて駆け寄る俺に、少年が冷徹な言葉を投げかける。

「ヤツヨシノモリノカミ八葦杜守を素直に引き渡せ。小生、気長に待つほど寛大ではない

俺は一気に血がのぼり、我を忘れて怒鳴り声をあげた。

「んなことどうだつていー! てめえツ、リョウに何をした! ! 」

咽が壊れるんじゃねえか、ってほどの音量でありつたけの怒りを少年にぶつける。

少年は冷めた目で、ため息をつくよつて答えた。それも、淡々と。

「小生の笛は神経を破壊する、その童の脳に音を通したのだ。じき心の臓は止まるであろう」

その言葉に、俺の怒りは頂点に達したのだと思つ。
奥歯を強く噛みしめ、軋む音が頭蓋骨に響いた。

距離にして20メートル。

少年を殴り飛ばそつと、思い切り大地を蹴り上げる。

俺は、大切なダチをまるで虫のように扱つての幼い少年に、本氣で殴りかかった・・・

5.1 救世主の名は『山一』（前書き）

お知らせでござります。

小説家になろうの秘密基地「新・イラストコーナー」にて、鏡美有雛先生に描いていただいた朱雀と青龍社長が貼つてあります！

鏡美先生のスレをご覧になつてください^ ^

めちゃくちゃ可愛いですよ~

《黒雛》

51・救世主の名は『山一』

「てつ、めええええええええええツ！」

怒りは理性を消失させるに十分だ。

俺は拳を振り上げ、怒声をあげ、子供めがけて間合いをつめた。

そんな時、いつの間にか小脇に抱えていたクリスティーナが、俺と少年の間にチヨロチヨロ出てきたのだ。

まっすぐ少年を見据えた俺の目には、足元につりつり子猫など映つていなかつた。

少年が、あっ！ と驚きの表情を見せたことも、頭に血がのぼった状態の俺には映つていない。

あと数歩でクリスティーナの小さな体は俺に蹴飛ばされ、宙に舞うだろう。

俺はただ、少年の顔面に鉄拳をお見舞いすることじか、考えちゃいなかつた。

その時突然、聞きなれた声が耳に入る。

「クリスティーナ！！」

俺と少年の間にいる子猫を庇うように横から現れた人物・・・それ

は、

山下・・・！

あっけに取られた俺は、沸騰した脳みそが冷めてきたのか、目の前の状況をやつと把握することができた。
ボルテージはゆっくり降下した。

「山下？ な、なんでここに・・・」
動搖しているとバレバレの声で、クリスティーナに頬擦りしている山下に尋ねた。

俺と少年は目を丸くして、割り込んできた人物を見つめる。
どうやら少年は、あまりの唐突さに言葉を失っているようだ。

山下がガバッと立ち上がり、俺と少年を順に見回す。

「春彦、お前とこの少年がクリスティーナを見つけてくれたのか・・・ああっ、本当にありがとう！」

目を潤ませながら、ひしひ。と愛猫を抱く山下。

クリスティーナ本人（？）も必死に飼い主山下の頬を舐めぐり回す。

どうやら彼は、この殺伐とした状況を分かつていよいよだ。
しかし、山下の出現のおかげでビリビリ張り詰めた空気がどこかへ失せていったのは、事実。

「お前がいなくなつてから、心配で心配で、夜も眠れなかつたんだ。
・・お腹減つてないか？ 怪我してないか？ 寂しかつたろう？」
ネコの体を何度もさすりながら、優しく愛おしく話しかける山下。
言葉だけを聞くと、愛する彼女に甘く囁いているよつに聞こえるぜ。

実際はネコだけど・・・

微笑ましい彼らの姿を横目で見ながら、俺はぐつたり倒れたリョウ
を抱え、少年に目をやつた。

その光景をじつと見ていた少年が、ポツリと呟く。

それは少し悲しげで、辛うつな声。

「ハ^{ヤシヤシノモニカニ} 葦杜守・・・そなたはその二^ニンゲンを慕つてゐるのか?」

今まで無感情な声でしか会話をしていなかつた少年。だが、その声には確かに悲しみに似た感情が乗つていた。

クリスティーナが山下の腕からすると抜け、少年の前に歩み寄る。まるで言葉が分かつてゐるんぢやねえか、と思つてらつだ。

「こやあ

」そう一聲鳴くと、子猫はジイッと少年の金の皿を見つめていた。

「・・・致し方あるまいな、そなたは望むよつて生きるがよい。ゆけ、”クリスティーナ”」

ポツリと、言い捨てるように呟く少年。

待て待て、なぜ『こやあ』って鳴き声のみで会話が成り立つてんだ? ネコ語解んのオ?!

クリスティーナは再び歩き出しつつ、山下の腕にぴょんと飛び乗り、ゆつたりとしつぽを振る。

山下はもう一度深々と頭を下げ、礼を言つべく顔をあげると、俺の

腕に抱えられたリョウに気が付いた。

「おや・・・？ リョウじゃないのか？ どうした、気分でも悪いのか？」

「いえつ・・・そのつ・・・」

言葉に詰まる俺は、唇を噛みしめ、顔をしかめながらうつむいた。

「ピィィィィィ・・・

再び笛の音が辺りに響き渡る。

「案ずる事はない。じきに田が覚めるであろうつ・・・それで、お手前方、用は済んだのであるつ、この西の竹林から出てゆかれよ」少年が目線を落としたまま力なく、【ハゲ竹林】から出て行くよつ、促した。

「まあ、リョウは寝ているみたいだし・・・じゃあクリスティーナも見つかったことだし、帰るとするか。」

山下は一件落着といつたまとめ方で、ネコを腕に抱き、踵を返して林を後にして。

去り際に少年に手を振り、大声でありがとうと挨拶をする。

俺はリョウを抱えて、ハゲ竹から早く出ようと、少年に背を向ける。少年は無言のまま、俺の背中を見つめていた。視線を感じる。

俺は立ち止まり、振り返らずに少年に疑問をぶつけた。

「お前、名前は？」

しばしの沈黙の後、ポソリポソリと答える少年。

「名は無い……だが呼び名ならある……小生、『千年王城・白虎』である」

名は無い。か・・・

朱雀とまるで同じことをいいやがる。

やっぱ、こいつが朱雀の言つてた『白虎』だったのか。

何となく嫌な予感はしてたけどな。

つーか・・・俺の想像図（＝マジチヨ）、全然合ってねえ・・・

「白虎、さりあの言葉ホントだろうな、じきリョウが田を覚ますつて」

「小生、嘘は好かぬ」

俺の推測だが・・・おそらく、ネコを大切に可愛がつて居る山下を見て、ネコは攫われたんじゃないつて分かつたんだと思つ。こいつ、悪い奴じやあないんだろうな。

だけど、朱雀が言つたとおりここにはヤバイ場所なんだな・・・
今度から一応忠告はちゃんと聞こつ・・・

落ち着きを取り戻し、止まつていた足を動かし始める。
リョウを背負い、ハゲ竹の出口を手指した。

「邪魔したな！ 白虎！」

俺は少年、もとい白虎に背を向けながらできるだけ大声で別れの挨

拶を告げる。

きっと反応は返ってこないだろう、まあそれはそれで良しこよ。

すっかり陽が沈み、俺はうつすら瞼を持ち上げ意識を取り戻したりヨウと共に、岐路へ着いた。

「あの朱雀に興味を抱かせた二ングン、サクライ ハルヒコか・・・
・・・ふつ、面白い童よ」

林を下り小さくなる後姿を見て、白虎が薄く笑っているのを俺は、知らなかつた・・・

52 · その呼び名、白虎（後書き）

ああ、シリアスっぽな雰囲気は息が詰りますね。
これから急激にラストへ突つ走ります。

朱雀には白虎と会ったこと・・・黙つておこひ。

あれだけ忠告を受けたにもかかわらず、西の竹林（ハゲ竹）に行つちましたんだから。

バレたら間違いなく、俺の首は胴体とおわりばしなきもなうねえ。

ヒイツ・・・！ それだけはヤヴァアイ。

そんな事をベッドの上で考えながら、俺の一日は今日も始まる。

騒がしい朝はこ慣れたもんだ。

朱雀と登校するのも当たり前になつた。

学校で完全復活した謙吾、リョウとバカやるのも楽しいんだ。

暇を持て余す玄武を、上手くあしらえるようになつた。

学校帰り、四越テパートで青龍社長に奢つて貰つテパ地下アイスは格別。

家に帰ると、予告なく出没しているどんぐり（お土産有り）にてめぐら。

相変わらず朱雀の取り扱いだけは注意が必要だが。

俺の周りは変なのが多いが、それは俺の生活の一部で、当たり前で、
日常で・・・

もちろんいつかこの日常が終る時が来る」とぐらり、俺にだつて分かる。

ただ、その瞬間まで謎は謎のままにしておきたい。

朱雀の正体・『千年王城』の意味・朱雀が俺と一緒にいる理由。

もしそれを知ってしまった時、スペツツ女は急に居なくなってしまいそうで……

俺の一田はゆづくら進んでいるように感じるが、確実に終わりに近づいていく。

疲れた体を癒すために、大きなため息をついて、俺はベッドにもぐりこんだ。

眠気が襲ってきたその時。

「三郎——！ アンタ最高だよおお～」

「鼻ちよつけんの三郎にはやはり、世界一の武器『ねつちよつけモノ』でなければ」

「

隣の部屋から歓喜に沸く妹とスペツツ女の声が聞こえてきた。

人がしんみりしながら寝ようつて矢先に……こいつら……！

おかげで目が冴えてしまったんですがつ。

つーか、『ねつちよつけモノ』の正体って武器なの？！

つーかや、どんなテレビよ？！

俺は謎のマコモを頭に描きながら、布団を頭から被り、奴らに惑わされぬよう夢の世界へ旅立つのだつた・・・

53・ねつじょこマニヤ最終回（後書）

54・千年つかへ王の城あつし都

そんな日常を繰り返して、季節は巡る

春

もう少しで俺は16歳の誕生日を迎える。
また桜の舞う季節が訪れた。

市立に行けるか行けないかの境目で、俺は無事市立武城高校に入学が決まりました！

（イエーイ）

合格ラインギリギリだつたけど。
マジあつぶなかつたあ～・・・

俺は数日後に控える入学式まで、存分に謙吾とリョウと一緒にバカをやつて遊びまわっていた。そこには必ず朱雀がいる。

そんな晴天のある日、俺と朱雀は久々に暇つぶしを兼ねて、観光地を歩いていた。

「どれ、京都案内・親切大使のわたしが先導してやろう」
朱雀は得意げに俺の手を引いて、観光地の中を進む。

つて、あれ？

朱雀の肩書きつて、『京都親善・世話焼き大使』じゃなかつたつけ？すんげえ適當だな、オイ。

観光客で賑わうスポット。

綺麗に朱で染められた神宮。

目線を上げると桜の木にピンクの花がほこりこんでいる。

俺たちは巨大な朱塗りの門の前にやつて来た。

丁度1年前もこの朱塗りの門の前に来たんだつけ。

門の周りにだけ、観光客は集まつていない。

まるで俺たちの為だけに用意されたように感じる。じつと門を見つめる朱雀の目が、少し悲しげに・・・俺の目に映つていた。

僅かな不安が胸を過ぎる・・・

「なあハル。覚えているか？」

ポツリと門を見上げながら、朱雀が呟いた。

俺は声を落ち着かせて、何？ と言。

「わたしがハルと初めて出会つたときこそ、言つた言葉

目を合わせない朱雀に、俺の心臓がざわめき出している。

「忘れた・・・」

・・・忘れてねーよ、ちゃんと覚えてる。
だけど、なんだよこれ。

まるで別れのシーンみてえじゃんか・・・

顔を背けて答える俺に、朱雀は目を細めてフツと笑ったのだ。

「なあハル。知っているか?」この地は遙か昔、千年も長きに渡り、
王が存在したのだ

空がぼんやり朱あかく染まりだす頃、朱雀が静かに語りだした。

なんだよ、この説明臭い件くだつは。

まるでラストに明かす、隠された真実。みたいな感じ、なんですか
ど・・・

俺は無言でその言葉に耳を傾ける。

「その王の都を守護するために存在した四つの神を、ニンゲンは『
千年王城』と呼んだのだ。千年王城により守られた都は、魑魅魍魎
さえも寄せ付けず、華やかに栄えた。

しかし、魑魅どもから都を守る神も、ニンゲンから生まれる悪意を
払つことはできない・・・」

朱雀の眉間に、ほんの少しシワが寄るのを俺は見逃さなかつた。

「栄華の陰には必ず戦があつた。ニンゲンたちが起こす戦はいつまでたつても終らず、千年栄えた都の最後の王は、民より戦を愛した。民もまた無意味な戦を繰り返し・・・そして遂にある神は都の王を見捨てたのだ」

朱雀は金の目を、ギュッと硬く瞑つた・・・

55・ハルと朱雀の、別れ

朱雀の硬く瞑られた目は、しばらく閉じられたままだつた。夕暮れの近づくこの場所に、重たい空気が漂つていた。

「神様が一人いなくなつて、千年続いた王の都は無くなつたのか?」

俺は言葉を慎重に選んで、朱雀に尋ねる。

「……うむ。南を司る神は王を見捨てた。そして程なく東の神も政を手放し、北の神は魔を放置し、西の神は……民を見放したのだ……そうしなければ、この都はいつまでも……」

1年間共に過ごして初めて目にする、朱雀の悲しげな表情。朱雀はゆっくりと瞼を擡げもた、赤く染まりだした空に金の日を向けた。

「南の神は……いや、朱雀は人間を嫌いになつたんだろうか? 王がいなくなれば、都が滅ぶと知つて見捨てたのか?」

「けど、あれから時代はすっかり変わつた。戦のない世はこんなにも美しいのだ」

「元に笑みを作つて、俺に向けられた朱雀の笑顔は、やっぱ悲しげで……」

きっと南の神は人間のことは嫌いじゃなかつたはずだ。

だって、親父や母さんや秋奈、それに謙吾やリョウに向けられたる笑顔は偽りじやあないはずだ。

俺はそう、信じてる。

「わたしは都が朽ちてからもずっとこの門から、この地を見てきた

そつと朱塗りの門に手をかざす朱雀。

「ここに住まう者や、ここを訪れる者は、少なからずこの地を愛している」

朱雀はこの京都が、争いのない今の京都が好きなんだ・・・
俺は静かに語る、彼女の横顔を黙つて見つめていた。

「ハルに初めて会つたときに、尋ねた問い・・・ハルは嘘をついた
な?」

悪戯っぽく微笑む朱雀に、俺はツッコミたい気持ちを抑え、そつ
なく答える。

「・・・そうだったつけ

「あの日、わたしはハルに『この地は好きか』と尋ねたが、その答
えが嘘だということくらい、お見通しだったのだぞ!」

やつといつもの笑顔に戻つた朱雀・・・つーか、お前が鉄扇で脅し
て言わせたんだろうが。

・・・でも、あの日の俺は住み慣れた東京を離れたばつかで、新天地の京都が・・・この土地がイヤで嫌で堪んなかつたんだつけ・・・

夕日を背に、朱雀は満面の笑みで俺と向き合つた。

「ハルにこの地を少しでも好きになつてもらいたかったのだ。京のまちで唯一、ハルだけが他の人間と違つた・・・だから、側に居ようとした決めたのだ。もう一度ヒトと携わろうと思つたのだ」

いつも俺に付きまとつていた真実は、実に単純な理由だった。
俺にこのまちを好きになつてもらいたい

理由はそれだけ。

皆が俺の周りに集まつた理由は、かつて人間の愚かさに嘆いて、都を・人を見放した朱雀が再び一人の人間と共にいる。

朱雀を変えた人間に興味を抱くのは当然だろう。

理由は、それだけだつたのだ。

俺は呆れたように、大げさに肩をすくめる素振りを見せた。
それにつられる様に、朱雀が楽しげに笑う。

「ふふつ、なにせわたしは『京都親善・世話焼き大使』であるから

なー」

・・・なんだ、ちゃんと覚えてんじょん・・・
つーか、朱雀は迷惑掛けてただけで、何もしてない気がするんです
が。

朱雀はぐるりと背を向けて俺に一言、告げる。

「時間のよつだな・・・わたしはもつ、行かなくては・・・

その言葉は、心臓を打ち抜くほどの衝撃を・・・俺に『えた。
それは間違いなく・・・別れの言葉だった。

「それではな・・・ハル

55 ハルと朱雀の、別れ（後書き）

次で最終回です。

最終回・ハルと千年王城・朱雀

俺が瞬きをした瞬間。

目の前に立っていたはずの朱雀は忽然と姿を消していた。

ありえねえ出来事だが、朱雀に会って、ありえねえ出来事すらも受け入れれるようになつた。

「なんだよ・・・1年間一緒に居たのに、別れ際はすぐえアッサリじゃねえか・・・」

俺は一人夕日を見つめてから、田の前に居るはずのない朱雀に向けて呟いた。

一緒にいるのが当たり前になつた朱雀。

ここに来るまでは隣にいたのに、家路に着いつといつ今、いない。

「確かに、初めてここに来た時はすげえ嫌だったよ、引越しも、転校も、この京都も」

観光地前のバス停で、我が家経由のバスを待ちながら独り言をボソリボソリと呟く。

「だけど、今やっと好きになれたんだぜ？」

お前は役目が終つたから・・・自分のいるべき場所に帰つちまつたのか・・・？ 朱雀・・・」

時刻通りにやつて來たバスに乗り込み、俺は家に着くまでの間、たくさん想い出を振り返つていた。

マンション近くの停留所でバスから降りると、下がつてしまつた肩をピンと伸ばして氣を引き締める。

いつまでもぐずぐず言つなんて、俺らしくねえ。

それに、親父や母さん、朱雀に懐いていた秋奈にすいやんと説明しなきやなんねえからな。

朱雀はもう、櫻井家に帰つてこないつて事を・・・

マンションに入り、エレベーターに乗り込むと10ボタンを力強く押した。

ガラス張りのエレベーターから見える赤に染まつた空は、1年前に見たあの綺麗な夕日とダブる。

チン！

あつという間にたどり着く10階、1001号室。

俺は躊躇^{ためら}いがちに手をドアノブに掛けた。

いつもなら俺の後から玄関へ入る朱雀。だが、俺の後ろには誰も立つてなどいない。

意を決して、ガチャリとドアを開ける俺。

玄関で靴を脱ぎ捨て、リビングへ進むと、どこかで聞いたような音楽が耳に入つてくる。

・・・ん?

なんだ、この変な音楽・・・?

チャツチャ、チャチャチャ チャツチャ、チャチャチャチャーチ
ヤチャ チャチャーチャチャ

前にも聞いたことがあるような・・・?
デジヤヴ?

俺は胸騒ぎに似たものを感じ、すぐさまリビングへ駆け込むと、テレビが設置されたある方へ鋭い眼差しを向けた!

「遅いではないか、ハル」

突然聞こえてきた、間の抜けた声。
それは毎日毎日耳にしてきた声。

さも俺が悪いみたいな言い草で、話しかけてきたのは・・・

「朱雀・・・？」

いなくなつたはずの朱雀が田の前で、夕方の再放送ドラマを座つて
見てゐるじゃありませんか。

・・・つーか、あれ？

さつさ俺たち、さよなら的な雰囲氣で別れたよ・・な・・・？

俺が呆然とリビングで突つ立つてゐると、朱雀は何もかも見透かし
た笑みを湛^{たた}えて説明調に話し出す。

い~

「あやうく夕方の再放送番組を見逃すといひであつた、危ない危な
ニンマリ、いや、憎つたりしい微笑を向けてくる朱雀。

ああ、『もう帰らなくては』つてのは、夕方のドラマが始まつちま
うから、早く（俺の）家に帰らなきゃ。つて事か？

ああ、忘れてたぜ・・・」いつが可愛い女の子の皮を被つた、悪魔
だつてこと・・・

してやられた・・・く、クソスパツツ女あああああ――――――

「ふふつ、安心するがよい、ハル。わたしはずつと付いていてやるからなー。」

朱雀の弾んだ声が耳を通り抜けた。

俺は心の中で絶叫しながらも、これから言わんとする葉はなんと
も情けねえ。

だつて、保身が大事だろ？

俺は目に薄つすら涙を浮かべながらも、必死に口角をつり上げ、鉄扇片手に微笑む朱雀へ一言。

「…………ウレシイナア…………」これからも朱雀と一緒にいれるなんて・
・ も・ ら・ う・ 」

春は出会いの季節、見知った土地の京都。
俺は千年王城と共に、愛すべきこの地で暮らしていく

おしまい(ぐすん・・・!)

最終回・ハルと千年王城・朱雀（後書き）

今までお付き合いくださいり、心から感謝致します。

展開が急だったことはこの場を借りて謝罪いたします。すみませんでした。

段落も、三點リーダーも、カツコ類もお構いなしに好き勝手に綴り、至らない箇所が多くある事と思いますが、「千年王城」を見捨てず、に読んでくれた皆様、本当にありがとうございました！！

黒鶴 桜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1379d/>

千年王城

2010年10月10日06時25分発行